演藝畫報

第九年　第拾號

昭和二年十月廿日印刷
昭和九年九月廿日印刷　第三種郵便物認可
昭和九年九月廿一日發行　（毎月一回廿一日發行）
「演藝畫報」第九十七號　第九年拾月號

衛生口錠

カオール

口中殺菌劑

口より入る病を防ぎ
清神を爽快にする

當籤賞品拾余萬点の

懸賞課題

有名な懷中護身藥の名は何か？

衛生口錠 ○ ○ ○ ○

答案用紙はカオールの効能書の餘白へハッキリとお書き下さい答案は封書として四匁毎に三錢切手をはつて左記へ御送り下さい

一人で何枚でも出ぜます皆様の御便利の爲各地のカオール販賣店で答案のお取りつぎを致して居ります

一、答 ○○○○
二、壹、貳等賞品の内お望みの品一點づつ
三、御覽になつた雜誌名
四、あなたの御住所 氏名

〆切 昭和九年十二月末日
發表 昭和十年一月下旬

大懸賞

簡單で……
面白い……
當りの多い

壹等 三十名

本銘仙夜具 一組宛
總桐三ツ重箪笥 一棹宛
高級ラヂオセット 一臺宛
ベビーパール寫眞機 一個宛
高級双眼鏡 一個宛

貳等 五十名

本銘仙座蒲團 一組宛
銀象嵌宣德火鉢 一對宛
本皮旅行鞄 一個宛
大型手提金庫 一個宛
クローム側腕時計 一個宛

三等四等五等六等拾萬餘

答案の送り先

東京市日本橋區水天宮前
安藤井筒堂藥品部
懸賞係

風味必ず御氣に召す
天ぷら御料理
季節向御料理
佛蘭西御料理

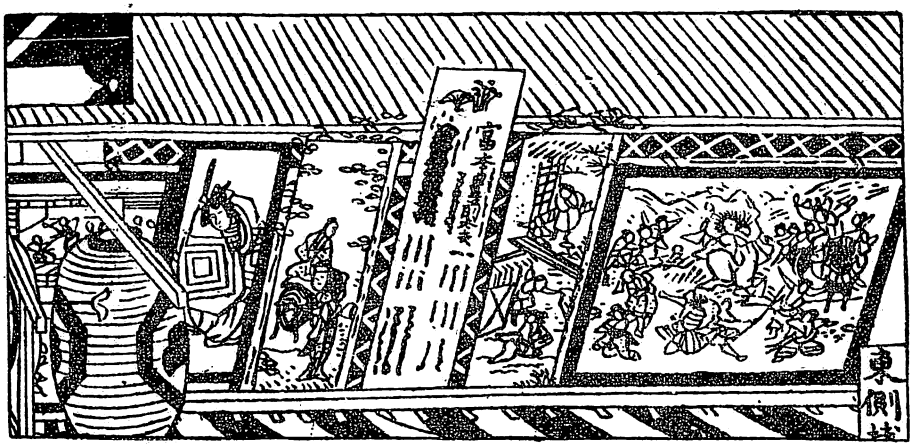
芝居情緒と食道樂

喜久屋食堂

道頓堀戎橋北詰

御芝居の歸りには打ち揃ふて
お座席で是非御會食を！

支店
大阪支店　心齋橋筋八幡筋角
北新地裏町
京都支店　木屋町ドングリ橋



◇道頓堀・昭和九年十月號・第九十七輯◇

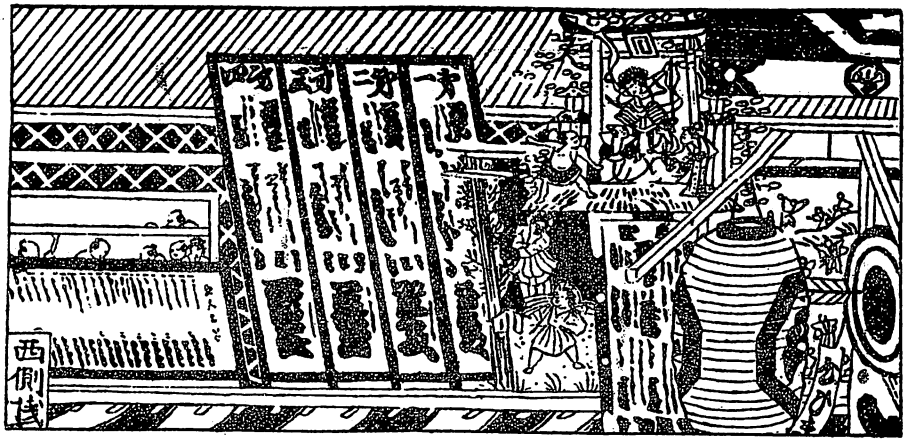
★口絵★

◎大阪歌舞伎座・畫の部「菅公」菅原道眞卿鴈治郎・妃棚姫芦燕・左衛門尉善友長三郎「春秋平家物語」清盛入道壽三郎・佛御前我童・武王の前福助・妹祇女時藏・瀧口武者正秀我當・「薯荷雪間の市川」樵夫斧藏彦三郎・山姥宗十郎・怪童丸三津五郎・片岡芦燕改名披露舞臺面「根元草摺曳」五郎時致宗十郎・小林朝比奈三津五郎・仲國」小督局芳子・冷泉松蓮・仲國長三郎「鵠山姫捨松」藤原大武廣嗣我當・御臺岩根御前我童・中將姫芦燕・横萩豊成卿我童・侍女桐の谷宗十郎・同浮舟源之助「釣瓶すしや の段」三位中將維盛福助・若葉内侍時藏・六代君大輔・母親お米源之助・娘お里宗十郎・いがみの權太鴈治郎・親獅左衛門市藏「心中千日寺」美濃屋三勝我童・赤根屋半七福助◎中座・松旭齋天勝◎浪花座「文樂座人形淨瑠璃」「世繼曾我」「玉藻前曦秋」「碁盤太平記」「近頃河原の達引」各舞臺面◎角座「壺崎兵曹長」記念撮影「あゝ吉河先生」「吉河先生」「瀧・大河原中佐」「進藤・かれ新都築」「魔風戀風」初野梅野井・東吾山口◎大阪劇場「青春の花束」クララ國友・スミス美浪・舞臺面

★表紙……鴈治郎の「菅公」長谷川小信氏筆

わが鴈治郎に寄す

◇鴈治郎の權太……高安吸江（二）
◇權太の味はひ……辻田公紀（四）
◇壽司屋……大澤休象（六）
◇「鮓屋」について……菱田正男（七）
◇歌舞伎狂言解題（十月の歌舞伎座）……世話垣鈍文（一〇）
松島家一門万歳……北川康男（一三）
×すしやと菅公……青田野風（一四）



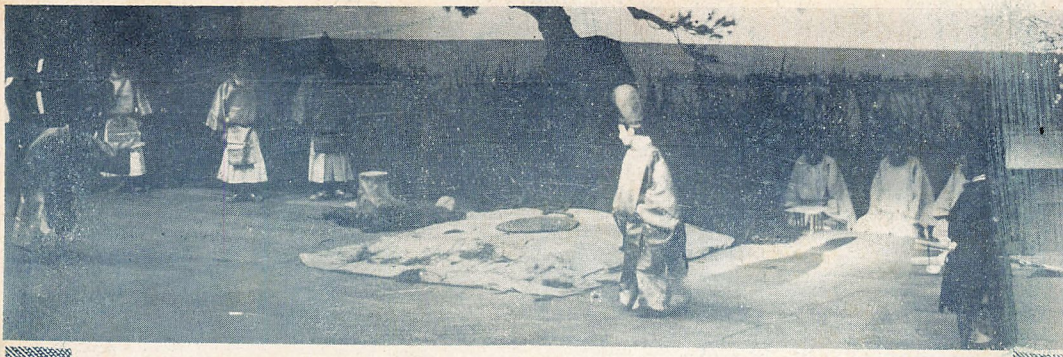
×新釋道明寺……高谷伸（一六）
×山田美妙と祇王……小泉苳二（一七）
×菊畑の謠曲味……森ほのほ（一八）
ステーヂよ・さようなら！
松旭齋天勝孃は語る……Z・Z・Z（二〇）
・・義太夫節發唱・・
二百五十年記念興行に就て……木谷蓬吟（二三）
芝居物語「あゝ吉河先生」……（二六）
お芝居の手引……山川聽雨（二六）
女軍進出……股野慶次郎（三〇）
—讀者投稿—
新國劇論……葛原康好（三三）
賢外集（現代語版）……大橋孝一郎譯述（三八）
▲六號讀物▼
劇評・九月の中座……西尾福三郎（四一）
明治四十年十月道頓堀各座案內……（四二）
執筆者噂聞書……珍阿彌（四三）
編輯後記……村上勝（四四）

天下の銘酒

白雪（シラユキ）

秋の味覚にシックリあった
味と色香も冴えた酒

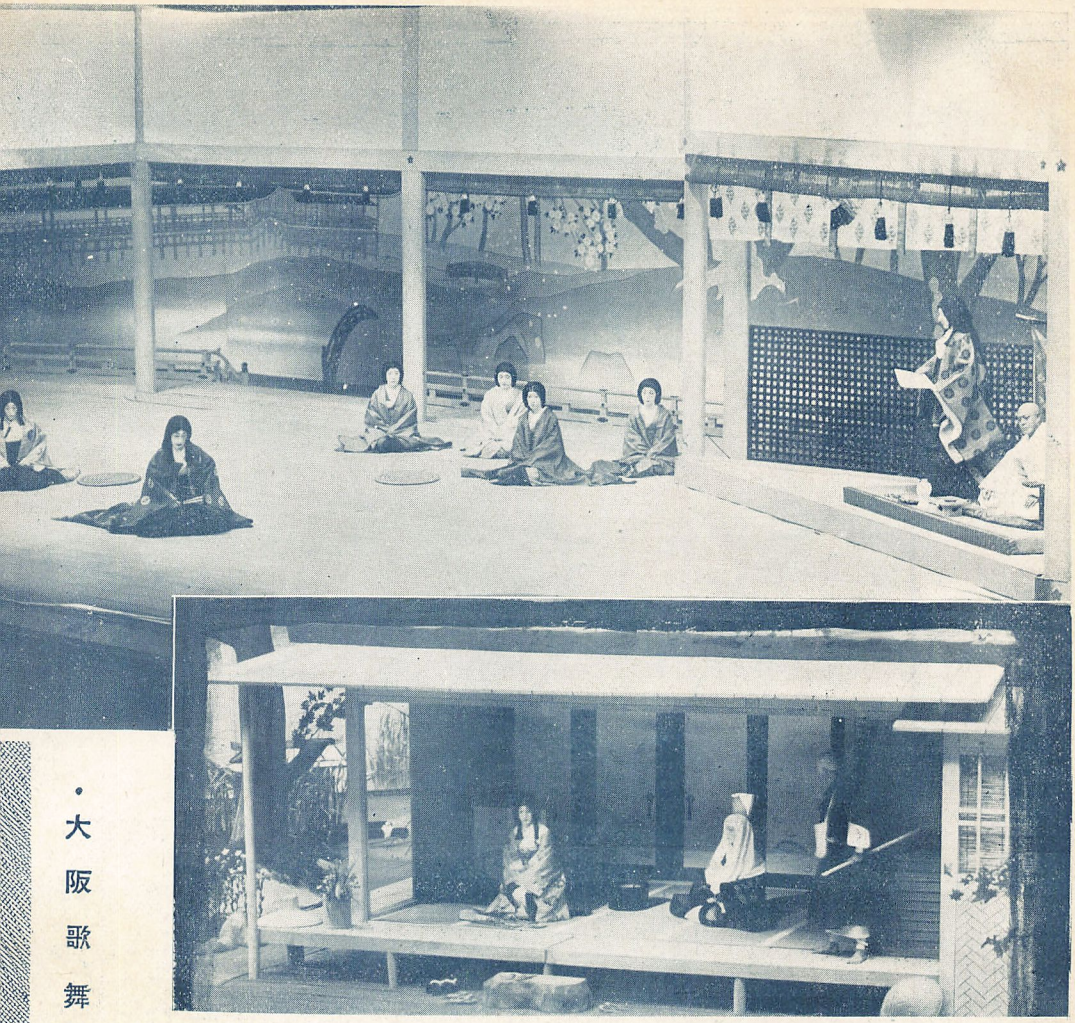
摂津 伊丹・灘
小西酒造株式會社



舞臺面「公　　菅」第三部の畫

菅原道眞　卿　　姫　柳　妃
左衛門尉善友　　長　三　郎
燕　　芹　　鷹　治　郎

●新築三週年記念興行●
●東西合同大歌舞伎●
●大阪歌舞伎座十月興行●



「春秋平家物語」一第部の畫

上　西八逢清盛館の場

平相國清盛入道　壽三郎
佛御前　我童
祇前の前　福助
妹祇女　時藏

下　嵯峨小倉山庵室の場

滝口武者正秀　我當
祇王の前　福助
佛御前　我童

・大阪歌舞伎座・

東西合同大歌舞伎
於 大阪歌舞伎座

山田美妙 原作
鳥江銕也 脚色

立命館出版部發行「祇王」改題

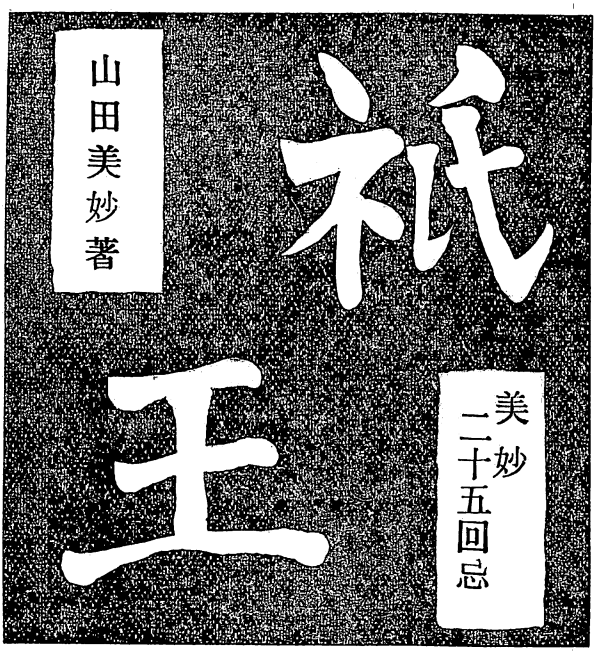
春秋平家物語 二場

新築三周年記念興行

上演記念 特賣

全國書店ニ販賣ス

四六版 四四二頁
特價 壹圓貳拾錢
送料 拾錢



書物と芝居
芝居と書物!!

讀め!!

一世の英豪平清盛をめぐる白拍子祇王と佛御前との哀しくも美しき物語

明治の天才美妙齋の遺著「祇王」茲に劇壇の鬼才鳥江銕也氏によりて脚色せらる

ねがはくは一本を手にして薄命なりし祇王のため感傷の涙を灑ぎたまへさらに不遇のうちに一生を終へし作者山田美妙齋の靈を慰めたまへ

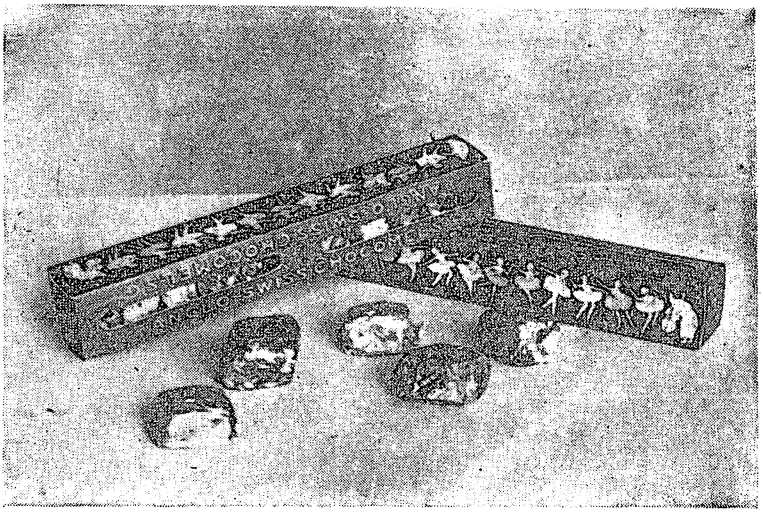
京都・廣小路・寺町

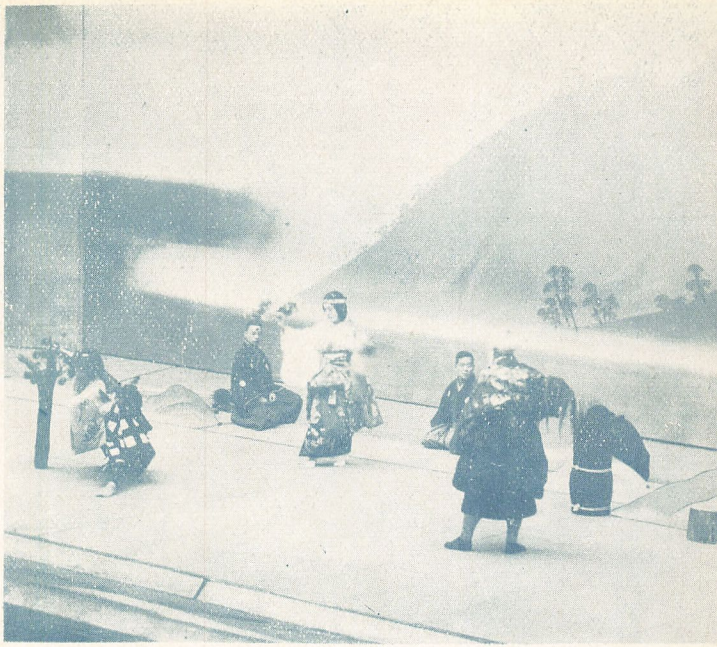
振替大阪二六九四四
東京 銀座 西二ノ一

立命館出版部

アングロス拂ス
ミルクチヨコレート
コーヒキャラメル
チヨコレート
キャラメル
チヨコメル

大阪市東區豊後町三番地
發賣元 株式會社 横山商店
電話東(94)四六四九 二〇一六 六一三一 番



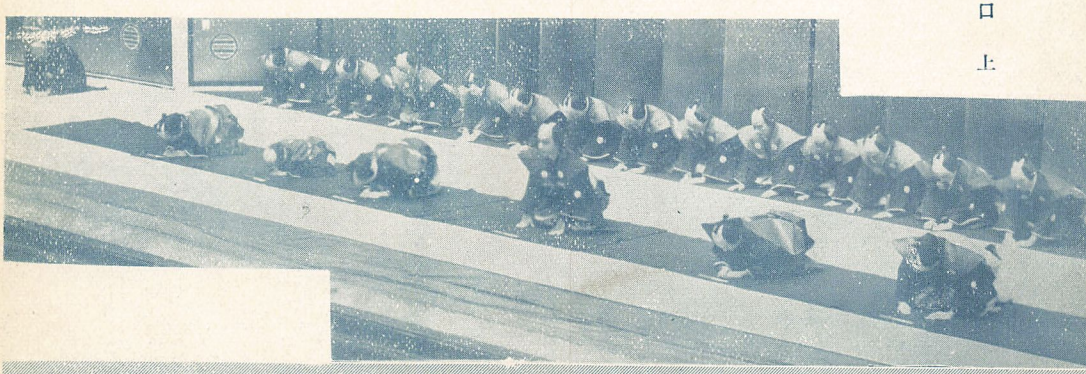


畫の部第二　「新荷雪間の市川」

樵夫斧藏　實は三田の仕　彦三郎
山姥　宗十郎
怪童丸　三津五郎

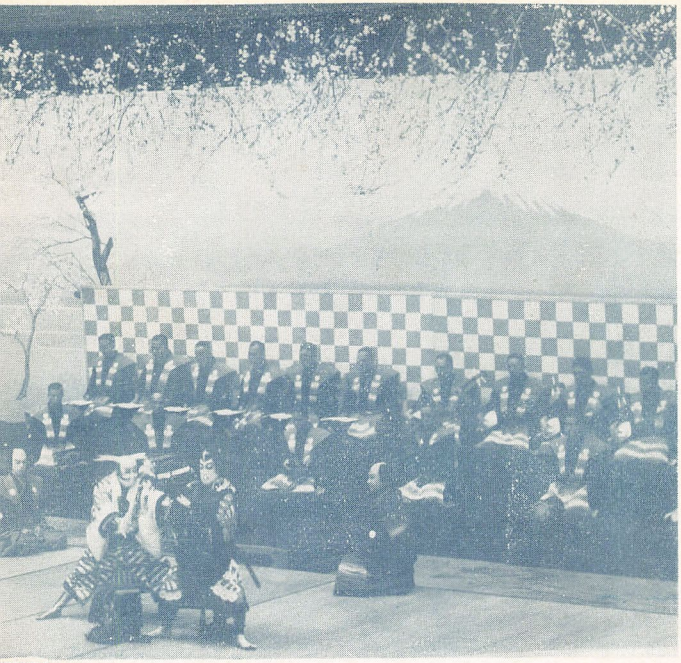
片岡芦燕
改名披露
口上

・大阪歌舞伎座・



・大阪歌舞伎座・

夜の部　第一　上の卷「根元草摺曳」



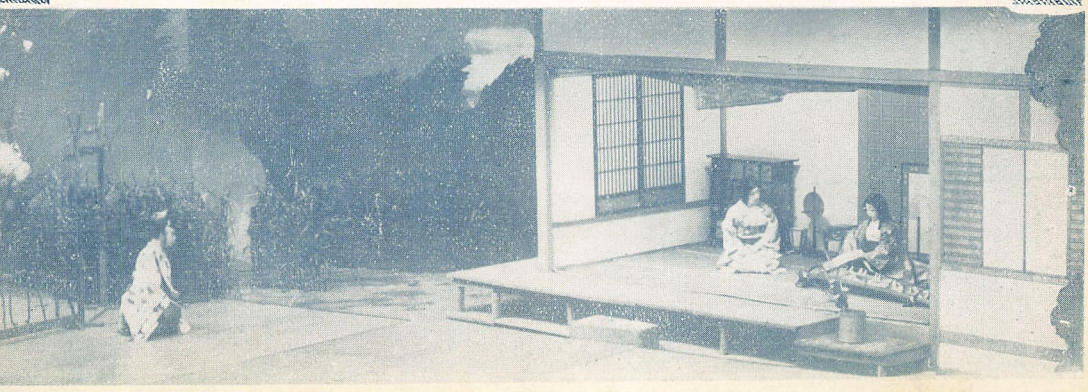
曾我五郎時致　宗十郎

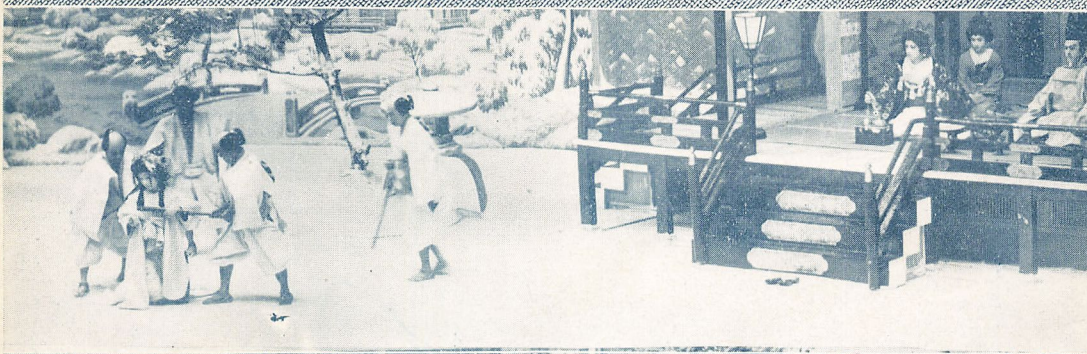
小林朝比奈　三津五郎

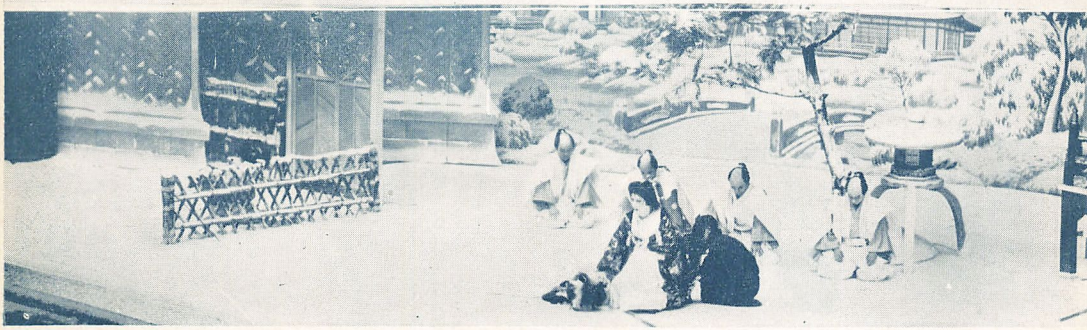
夜の部　第一

中の卷「仲　國」

小督局　芳子・冷泉　松莚・仲國　長三郎

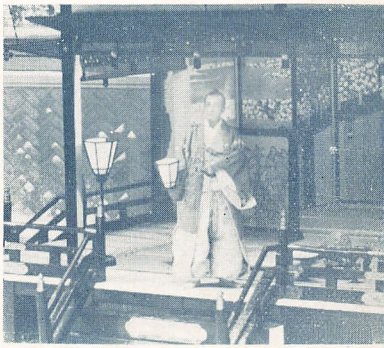




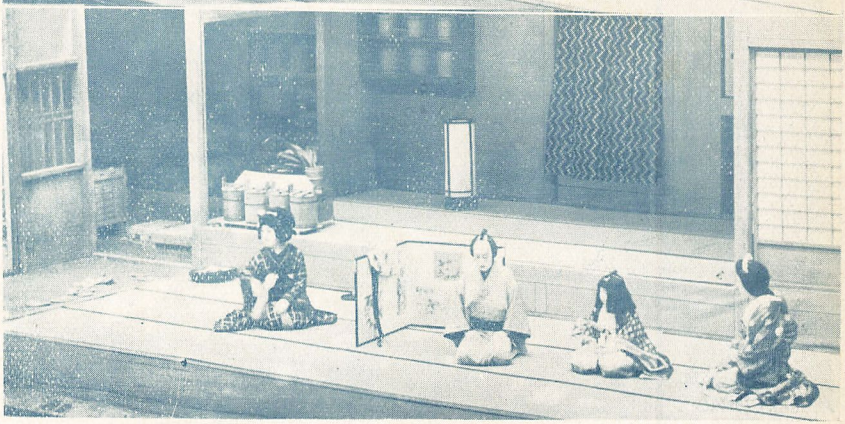


夜の部　第二「鶴山姫捨松」

藤原大貳廣嗣　我當
御臺岩根御前　我童
中將姫　芦燕
横萩豐成卿　我童
侍女桐の谷　宗十郎
同　浮舟　源之助



・大阪歌舞伎座・



下男彌助　實は三位中將維盛　福助
若葉内侍　時藏
六代君　大輔

夜の部　第三「釣瓶すしやの段」

母親お米　源之助
娘お里　宗十郎
いがみの權太　鴈治郎
親彌左衛門　市藏

大阪市東區京橋三丁目七五

株式會社 大林組

支店 東京、横濱、名古屋、福岡、大連
營業所 京都、神戸、金澤、靜岡、廣島
仙臺、京城、臺北、新京、奉天
工作所 大阪、東京

便所の防臭に困る方は今直ぐ

藥學士　林彪太郎氏創製

家庭必備品

使用簡潔
十滴奏効
無害無毒

「アポロ」ハ一ツの便所に大抵十滴撒布すれば充分奏効します。

「アポロ」ハ溶かすことがいりません、このまゝ撒布すれば宜敷いから少しも面倒でありません。

「アポロ」ハ他の藥（カンプラ油、デシン、ナフタリン、クレゾール、樟腦）と異ひ化學的變化により放臭物を無臭とします。

「アポロ」ハ毒性がなく無害で便所にアポロの臭ひが殘らぬ爲め汲取人がイヤがりません。無論農作物にも無害です。

「アポロ」ハ使用法が輕便で奏効的確、用量が僅かですから經濟にもなります。

△使用法　一回十滴乃至十數滴づゝ（場所により多少の加減を要す）一回多量に撒布するは却つて効力を減ずる事あり使用後は栓を堅くし冷所に置かるべし。

（定價一瓶小金五拾錢　大金壹圓）

到る處の藥店

各百貨店に販賣す

發賣元

大阪市東區伏見町三丁目

光榮商會

電話本局三一三五番
振替大阪三一一七番

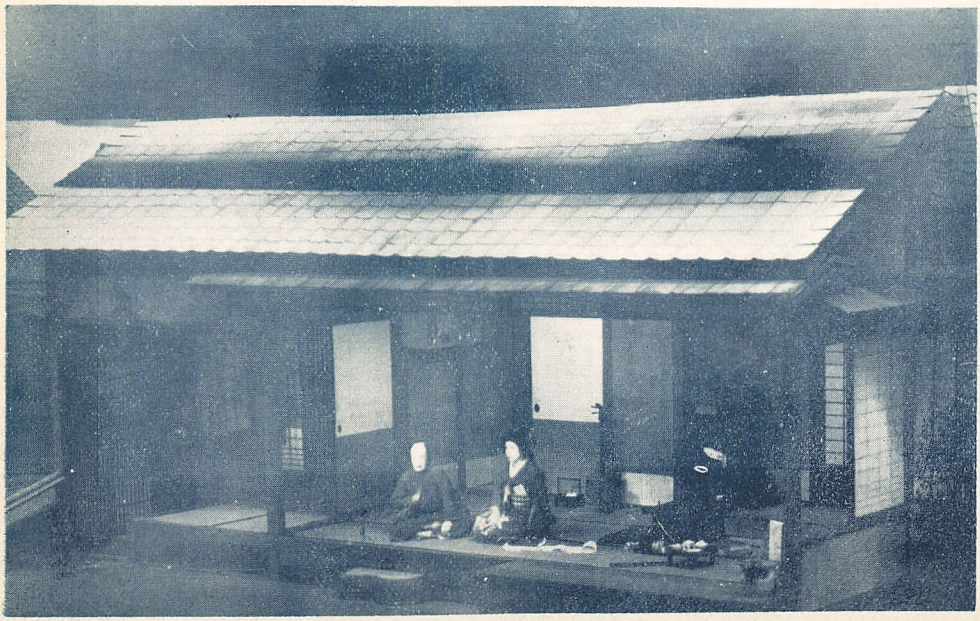
大阪歌舞伎座

夜の部　第四「心中千日寺」

童　　我　・　勝三屋濃美

助　　福　・　七半屋根赤

下　そ　の　舞　臺　面



ミナサン！サヨウナラ！

・松旭齋天勝・

上は「不思議の檻」舞臺姿

下は世界一週マヂック・ショウと銘打つて大阪人を驚かせたダンテ氏が、中座に天勝を訪れたスナップ

中座十月興行

★日本に於けるチョコレート製造の先驅者★

五錢 十錢

熱風

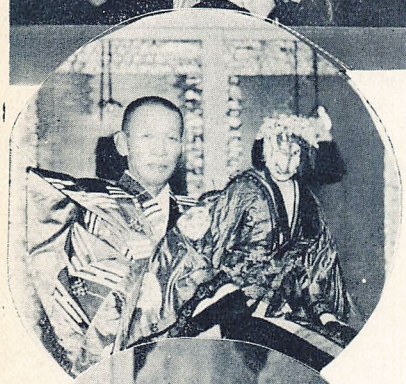
新興キネマ秋の銀幕を飾る代表作

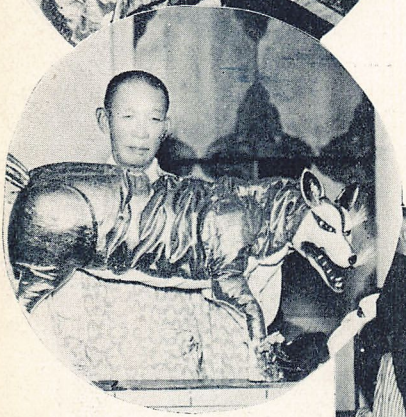
原作　中野實
〃サンデー毎日〃所載
脚色　吉村廉
撮影　相坂操一
内田吐夢監督

巨匠内田吐夢が「河の上の太陽」に次ぐ野心篇
小杉、島、高津のトリオが結成する秋の待望篇

小杉勇
高津慶子
島耕二

三桝豊
里見凡太郎
沖悦児
小坂信夫
浦邊粲子
田中筆子
八雲映子
池雅子
入社第一回出演





元祖義太夫二百五十年記念興行

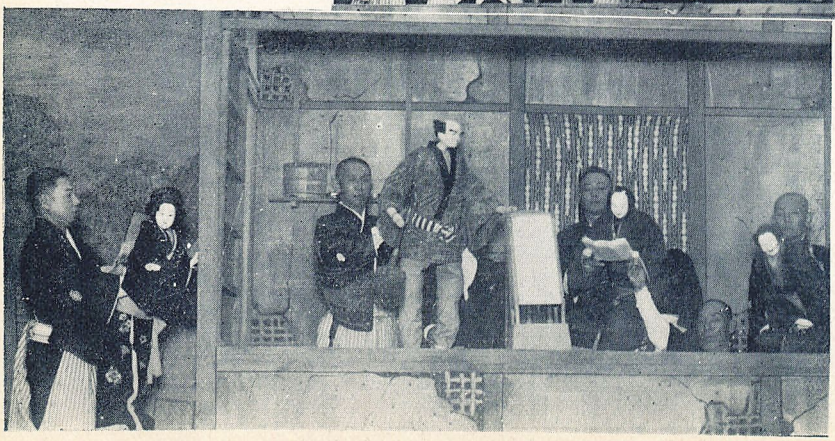
文樂

浪花座十月興行

(上) 世繼曾我　中村閑居の段

(右) 玉藻前曦袂　道春館段

(下) 碁盤太平記　山科の段



座人形淨瑠璃

近頃河原の達引

堀川猿廻しの段

第一「盧崎兵曹長」　第三景　八字橋激戰の場

・角座十月興行關西新派劇・

原作者酒井少佐を圍んで、脚色者中井恭孝氏
出演俳優「盧崎兵曹長」記念撮影

松竹衣裳部

本店　大阪市浪速區南坂町松竹ビル内
電話　戎五六三四番
東京支店　東京市淺草區駒形町二十三番地
電話　淺草六六六一番

小道具・小裂

貸衣裳

素人演藝會
宴會の催物
春秋温習會
婚禮の衣裳

其他一般の衣裳多少に拘はらず御用利用下
さい御來客の御相談に應じ便利よく
お取計ひ致します……

御園白粉
上品な明るい化粧美を
お望みなら……是非……
濃くも・淡くも
思ひの儘に溶け
明るい上品な色
合ひは優秀品の
第一線を確保、
御園チタニューム白粉
白・肌　各五十錢

第三 美風談 「あゝ吉河先生」

子蓮瀧　　生先河吉

上　大河原中佐

吉河先生

かれ新

藤進英太郎

瀧蓮子

都築文男

第二「魔風戀風」

初野

東吾

梅野井秀男

山口俊雄

角座十月興行

松竹少女歌劇　第二回十月公演

「青春の花束」　全十四景

大阪劇場

クララ　國友和歌子

青年スミス　美浪スミ子

●●●　第十一景「亂れし花束」　●●●

文藝春秋オール讀物號所載・陸直次郎氏原作による

オールトーキー

殴られた河内山

脚色監督　衣笠貞之助

市川右太衛門　主演

飯塚敏子　尾上榮五郎　共演

突貫小僧・小林十九二・野寺正一
葛城文子・志賀靖郎・坪井哲
小笠原章二郎・上田吉二郎・小林重四郎
山路義人・永井柳太郎・石原須磨男
高堂國典・青木弘光・石川冷
澤井三郎・中村吉松・關操
中川芳江　助演

・松竹キネマ京都超特作映畫・

クラブ白粉

あたしの歡ぴ……

あたし……
クラブ白粉
つけてるの！
クラブ頰紅
つけてるの！
クラブのルージュ
つけてるの！
さんごのやうな頰
いちごのやうな唇
あたし……
クラブが大好きよ！

肌色時代

月刊・演劇研究・雜誌

演藝畫報

第九年

十月號

第九十七輯

◇十月道頓堀各座◇

歌舞伎座　東西合同大歌舞伎（毎日正午五時半開演）

浪花座　オール文樂人形淨瑠璃（毎日午後三時開演）

中座　新國劇（十六日より秋の公演）

角座　關西新派劇（十七日より四の替り公演）

わが鴈治郎に寄す

高安吸江
辻田公紀
大澤休象
菱田正男

鴈治郎の權太・・・高安吸江

權太の演出に菊五郎（五代目）のいなせな江戸式の理想（？）派と、團藏の土臭い無賴漢の寫實派との二樣があるのは、好劇家間によく知られた事ですから今更繰返しますまい。

明治二十八年に五代目菊五郎が再度の來阪で權太や忠信などを演じましたが、其時同優から直接に聞いたと云つて故渡邊霞亭翁がいつか話されたことがあります。それはその當時此權太の型を傳へるべき人は東西劇界を見渡して先づ絶無と思はれるが、鴈治郎なら演れないことはあるまいと云ふのです。それもそうでしやう。羽左衛門に延若はまだ廿歳そこ〳〵であり、六代目はヤット十二歳ですから、此人々が四十年後の今日權太をやつて成功するとは、如何

に鋭敏な五代目も其頃まだ見通すことは出來なかつたでしやう。

それにしても菊五郎が鴈治郎の何處を見込んでそう云つたのでしやうか、無論鴈治郎に江戸式の遊び人といふ柄のないことは明であります。然しまた大和上市村の土臭い惡漢でもありません。彼はやはり五代目と同樣に和やかな線の持主で殊に愛嬌に富んだ麗しいその眼は、此れ亦五代目同樣決して純粹の惡役にはなり得ない質を備へてをります。或はそうした點が注意をひいて所謂理想派の後繼者たり得ると菊五郎が考へたのかも知れません。

それはとにかくとして、果して成駒家が五代目の教をうけたのか、其點はまだ本人に確かめては見ませんが、鴈治郎の權太は大體に於て五代目系である事は確かです。尤研究好きの優の事ですから教はつた型を絶對的に盲從して固守するといふことはなく、いつもより良き或ものを求めるのに不斷の努力を惜みませんので、今日では獨特の一形式と云ふべきものに出來上つたとも云ひ得ませう。尤も其型の一々については冗長になる恐がありますから略すとして、面白いのは其柄です。

團藏のは下市村の破落戸といふ點を寫實式に見せやうとします。人形の方でも見るから惡黨です。それはそうした極端の惡から極端の善に變ることによつて見物を驚かそうといふ常套のトリックですが、しかし今日の見物の中で權太を惡人として惡くんでかゝる人は殆ど無いでせう。

何しろ父は腰ぬけでも平家の侍、息子はとにかく公達六代君の御身代となり得るだけに、唯の百姓の子ではすまぬ筈、それに隱賣女としては珍らしく貞淑な小せんが子まで儲ける程に思ひつくのですから、團藏式の純惡黨といふより不良性の中にもどこか善良さが殘つてゐなければならぬので、此點鴈治郎の軟かい味が尤適當であると激賞した人もありました。しかしそれ程でなくても形式美を尊重する古典劇では、五代目や成駒家のやうに滋味に富んだ演出に云ふに云へぬ妙趣が感じ得られるものです。

實際母親を瞞して三貫目を衒る時の嬌態や鮓桶抱へて花道の引込など、菊、鴈共に行き方は違つても皆それ〳〵の妙味を出してゐました。引込で思ひ出しましたが、『樣子聞いたか』と暖簾から例の辨慶縞の浴衣姿で出た權太が二重から飛び下りる形はいかにも颯爽たるものでありますが

晩年の團藏は左の眼が全く見えなかつたので、台辭でゴマカし一段づゝ捜つて下りてゐました。鴈治郎は其團藏より年長であり且近年脚を腫らしてゐますので、そうした敏活な動作は危險で到底やれませんから何とか良い工夫があるでせう。

それから普通此役は肉を着ないことになつてゐますが、七十歳の三好家は手負になつて肌をぬぐと櫻の文身の肉を着てゐました。此點を鴈治郎はどうするかといふことも亦飛下り同樣面白い問題と思ひます。

此手負になつて一文笛をお里に代はつて吹かせたり、落入りで其笛の入つてあつた巾着を取り上げて我が頰にあてゝ子に對する切なる愛着を見せるなどは鴈治郎の創意ですが、巾着の色の眞紅なのが此場にふさはしい色彩を見せて一しほ憐れに感ぜられます。

終に是非一言したいのは、例の『及ばぬ智惠で梶原を謀つたと思うたが、あつちが何にも皆合點云々』の條がいつも時間の都合か略される事で、親を欺き女房子を犧牲にして主を救ひ親を喜ばす身代物語はさまで珍らしくはないがウマ〳〵一杯喰はせたと思つた此方が計られてゐたと云ふ失敗の苦悶、故主を救ひ得たとの自負心が根底から打碎かれた憤懣、それでも肝心の維盛卿の命は助かるのでそこに淡い諦めと滿足を覺えながら淋しく死んで行くといふ、古典としては極めて複雜な心理狀態にある此權太をあらはすに尤も重要な此文句を刪るのは甚遺憾であります。私は鴈治郎の樣な名優がこうした同情すべき權太を生命づけるべく十二分の努力をはらはれんことを心から祈る次第であります。

權太の味はひ

極め付けの源藏を播磨家に廻し五代目（菊五郎）讓りで九代目（團十郎）仕込みの大時代な松王を、何十年振り？

・・辻田公紀

に出して古味な寺子屋一齣を見せやうとしてゐた成駒家が吉右衛門の都合で豫定變更、之も成駒家ものゝ隨一『菅公』

と『すし屋』で大に氣を吐こうといふ十月の大阪歌舞伎…

背公は固より成駒家に書た翫辭樓十二曲の内で彼の悠つたりした品位其儘が舞臺であつて、間に合せの利かぬ獨特のもので遠がに遠目の鴈治郎でも、コイツばかりは影法師にもならないのだから問題は別である。

すし屋の方は之は昔からのものだけに目星しい俳優は何れも手にかけないものはない位、古來樣々に演こなされてきて無論成駒家も幾十回となく演じ拔いてきて急所々々は深刻に考索濟みで、それが益々年と共に圓熟してきて完膚なき迄の體驗を展開してゐるのであるから、之に對し今更品隲を加えて見る必要もない故に、爰には一つ看客の側にたつて松王と權太の味はひを忖度して見やう、

由來出雲といふ作者は先月の大塔宮曦鎧と云ひ大友の眞爲でも、克く贋首を扱ふて色々の寸法に欽め樣々に技巧を凝らしてゐるが、中にも寺子屋は我子の首を前にした松王の激情、悲壯な心腹を深刻に描き出して看者の意識を最高潮に吊り上げることに巧致が凝らされてゐるが、すし屋の方は首其ものを左樣に重視しては居らない、使者にたつてくる梶原に對しては極めて主要な維盛の首も、内や床しき……の陣羽織を突き付けて歸る程、既に裏を搔てゐるのだから左程重要に見る必要もないのかも知れないがそれは後に判ることで、最初は矢張り問題の首であるにも拘はらず影にフィに終つて唯、『……おいとしや親爺さま……』以下の文句で贋首の筋を諷はせてゐる、之では小金吾が可愛想であるが、それでも『……月代剃つて突き付けたは、矢つ張りおまへの仕込の首……』と權太が言ひ譯してくれるので萬更犬死にもならないから、主馬の小金吾武里たるもの以て冥すべしである。

爾こで松王も權太も極めて大幅で共に複雜な心境に彩どられてゐる役だけに背公さんのやうに一ト筋押しには行かない、殊に權太は世話に出來てゐるだけに松王のやうにズツシり重く貫祿を見せて忸つとしてゐると、鋭どい源藏といふやうな相手が急所を突いてくれるといふ便誼を持つてゐない。

又權太は松王のやうに最初から企圖だ肚を持つて出るのではなく、全然忠義も人情も理解して居らず、唯、偶々足弱連れの纖弱い敵手と見こなしてホン博奕の資本稼ぎに思ひ付た一ト狂言が、意外に絡み付て豫期せなかつた動機を

生み、複情が經綿してきて遂に妻子を沾り身をも果すまでの大芝居を、一人で築き上げて行く大立物……大責任者であるだけに、蓋し松王以上の工作を要する至難な役で、演者自身も極めて興味の加はる役に相違ない。

其何でもない處から悲劇に落てゆく道程の心境の變化、心機轉換の機構を見せて終へば底を割つて終ふから表面は飽くまで咥みの權であつて、母親に甘えて金を騙るのも維盛一行の旅費を作る目算ではなく、矢張り……『しやくり上げても出ぬ涙　鼻が邪魔して目の緣へ、とゞかぬ舌ぞうらめしき……』の調子の權太でなくてはならない皮肉を持つ。

斯の如くして門端も踏まさない無賴漢なればこそ此一卷きの舞臺が合法的に進展して行つて、『……女房小仙が悴を連れ、親御の勘當古主人の忠義、何うろたへることがある、私と善太をこれ斯ふと、手を廻すれば悴めも、母さまと一緒にと、共に廻して縛り繩、かけても〳〵手がはづれ結んだ繩もしやらほどけ……』と手負ひになつてからの口說き、此邊りが正に此一齣の最高峯で舞臺も見所も嗚咽の波といふ芝居中の大芝居である。

親子夫婦の恩愛の至情を揭げて『……心は鬼でも蛇身でも、こたへ兼たる血の涙、可愛や不憫や女房もワツと一聲其時は、血を吐きました……』切情を此時始めて語り明かすので舞臺は彌が上に緊張するのだが、今までの徑路に斯ふした深刻な哀切の情を表白する機會がない、唯、繩付二人を景時の前へ牽て出て『面を上げツ……』と足の先まで題を突き上げ、自分は仰向いて取つた鉢卷を目にあて、泣く行き方はある、併し之も俳優に依つて演る人も演らない人もあつて、後で手負ひの語りに痛切に告白するのだから無駄なやうではあるが、謂はゞ親子夫婦十生の別れ、一期の愛着を强持するためにも、之れ位のことはあつても差支えないであろう……。

壽司屋　・・大澤休象

鮓桶を抱えて、花道の七三で、きりつと見得を切る。鴈治郎丈の、いがみの權太。想像するだけでも、胸が清々する。が、本格的の批評は、別に其人ありと思ふので、僕は少し變つた觀點から、あの芝居を眺めてみる。

第一に、維盛といふ、平家の落人だが、嘗つて富士川の滯陣に於て、水鳥の羽音に愕き、弱虫の名を千載に垂れたほどの、日本の武士としては、稀にみる出來損ないの男ではあるが、その男つ振りのよかつた事は、安元〇年、法皇の御ことぶき五十の算賀に、青海波を舞ふて、宮廷の媛君達を惱殺し、櫻梅少將と艶名を謳はれた位だから、大和國下市村、彌左衛門の娘に手をつけて雲居に近き御方に、鮨屋の娘が惚れられよかと……並木千柳か、竹田出雲かどちらの筆に成つたかは知らないが、作者といふものは面白い事を描くわい。夫れに、若葉の內侍が、すその長い〳〵うちかけを着て、そろり〳〵と生命からく〳〵遁げて來て、三角關係といふ奴さ、ドド、梶原の置いて行つた品を檢めると、輪袈裟が出たので、高野山へ發足するといふ段取になるが、史實によると、維盛は、粉川寺に至り、僧源空に戒を亨け、夫れから熊野浦へ行つて、舟に乘つて、入水したとみせかけ、ほんとは、藤繩といふ所に隱れ住んで餘生を送つた。その維盛の入水したと傳へらるるは、勝浦の沖合一里ばかり、山成島といふ岩山で、僕、青年時代に其處に遊びとても奇拔なローマンスもあるが、紙數が盡きたから先づ此邊で擱筆。

『鮓屋』について

菱田正男

關西劇壇十月の豪華陣ともいふべき大阪歌舞伎座の鴈治郎、吉右衛門の合同劇が、吉右衛門の病氣のため遽かに實現せなくなつたのは殘念なことである。

吉右衛門にしても大阪歌舞伎座には、はじめての出演であり、『叉か』との非難はあつても『二條城の清正』を出して、あの大舞臺一ぱいに、あの大道具を使つて見せる壯觀や、鴈の松王丸、吉の源藏顏合せの『寺小屋』などいづれも期待してゐただけ淋しい氣がする。

その他の狂言も搗き替になつたが、そのお蔭で鴈の『菅公』や『いがみの權太』が見られるやうになつた、最近『紙治』や『石切』や『望みの港』『大晏寺堤』などゝ『またか』と言はれるものばかりやつてゐた鴈治郎が、隨分久しぶりで『千本櫻』の權太を見せるのは、その出來榮へはともかくとして、あの老齡にも拘はらず、車輪の舞臺を勤めやうし、これは相當觀物であらう。

◇――◇

元來この『義經千本櫻』は竹出出雲の作だといふが、本當は出雲、三好松洛、並木千柳らの合作で、全部五段から成り立つてをり、大序が大内の場、北嵯峨庵室の場、川越上使の場、二段目は伏見稲荷の場、大物浦の場、三段目は椎の木、鮓屋の場　四段目は靜御前と忠信の道行の場、吉野藏王堂の場、五段目は吉野山といふことになつてをり、大序などは近ごろ殆んど出ない、三段目の切りの『鮓屋』は、無賴の徒權太が、翻然悔悟して、御主へ忠義、親への孝行から、わが女房、子を犧牲として維盛夫婦を助ける、それとは察せぬ親彌左衛門の双にかゝり、一切を打ち明けて果てるといふ苦衷を描いたもので、『千本櫻』では『道行』と共に一般によく知られてゐるところである、『太平記　曦鎧』の身替り音頭や『菅原傳授手習鑑』の寺小屋と同じく、出雲の作によくあるこれも子供が身替りになる一つである。

この狂言がはじめて操りに上つたのは、延享四年大阪竹本座で、當時の人形遣ひの名人、吉田文三郎が衣裳、鬘の好みまで、自ら考案したものだといふ、歌舞伎で、はじめて演じたのは、寛延元年正月伊勢の芝居だといふが、江戸では同年正月中村座でやつてをり、配役は澤村長十郎の權太、市川海老藏の彌左衛門、嵐富之助のお里、中村七三郎の維盛、市川宗三郎の梶原であつたと演劇史に出てゐる。

この芝居には鮓屋の娘のお里なるものが現はれて、彌助と名乘つてゐる維盛卿と戀仲になつてゐるが、維盛卿を訪ねた若葉の内侍との物語を聞いて、はじめて彌助の身許を知り『父も聞えず、母さんも、夢にも知らして下さんしたら例へ焦れて死ぬればとて、雲井に近い御方へ、鮓屋の娘が惚れらりよか』とかき口説くところがあるが、この台詞は『鮓屋』といへば、すぐ口に出るほど知られてをり、よく眞似されてゐるのもおもしろい。

◇――◇

鴈治郎のいがみの權太も、たしか大正三年九月京都南座でやつた切りで、關西では見ないと思ふが、或ひは記憶にあやまりがあるかも知れない、自分はその時の舞臺を不幸にして見てゐないので、こんどの、鴈治郎の權太で、はじめて見るわけだ、當時の話に、何でも演出も時代と寫實を一日交替で見せたとかいふ。

その當時の番附を見ると、配役は、鴈治郎の權太、梅玉の梶原、巖笑の維盛、雀右衛門のお里、魁車の內侍、林左衛門の母、橘三郎の彌左衛門とある、殆んど皆故人になつてゐる、それからザツと二十年あまり、鴈治郎が今度この役を美事やり通すかは一寸興味ふかいものだが、今春大阪中座の『里見八犬傳』の犬山道節の花道の引込みを見た自分は、『鴈治郎は最近健康を取り戻した』と大いに喜こんだだけに、こんどの權太にしても、アツと言はせるほど、元氣な舞臺を見せてくれるだらうと大いに期待してゐる。

（九、十、一）

洋酒界の革命兒國產洋酒の逸品

國產金鶴印

ウキスキー
ブランデー
ベルモット
キユーラソー
ペパーミント
滋養葡萄酒

元賣發

會社
株式
橫山商店

大阪市東區豐後町三番地

電話東(94)一六六一 二〇一三 四六四九

歌舞伎狂言解題

世話垣鈍文

拾月の歌舞伎座は成駒屋が久々で來阪する吉右衛門と大顔合せすると云ふおよそカブキファンにとりまして心嬉しいスケジュールで御座ゐましたが、如何にやせん、播磨屋の病氣の爲に終に來阪不可能。僕達の失望も可成り大きいもので御座ゐました。番組も一度決定してゐたのが急に變更なつたものですから、解題子の方もスコブル周章て終つたことでした。しかし、例へ播磨屋一人が拔けたところで、御存知通りの豪華なスタッフですから、決して御小言は云へない譯で御座ゐます。

鶴山姫捨松

歌舞伎の代表的な責め場に、浦里とこの中將姫とを擧げることが出來ます。そして責め場とは、一種の變態性の世界なのです。凄艶な美女が眞白な雪の中で、打ちすえられて行く、その亂れた花の樣な姿態から發散する官能美、此處に責め場特有の魅力があり生命があるのです。その故に、此の狂言は所謂雪責めと名付けられて、その場面が特に名高くもあり珍重もされてゐるので御座ゐます。もともと此の狂言は元文五年二月六日（百九十八年）前初日の若竹座で上演された五段續きの操淨瑠璃として並木宗輔の書きましたもので『雪責の段』は三段目の切にあたつてゐるのです。寛政九年二月（百三十八年前）道頓堀東の芝居で上演されました時、『中將姫古跡松』と云ふ外題で興行されまして以來、今もなほ此の方の外題が多く用ひられてゐる樣で御座ゐます。因みに江戸に於ける初演年月を見まするに、嘉永五年十一月八日（八十三年前）初日の市村座で御座ゐました。

義經千本櫻

此の淨瑠璃は、延享三年（百八十九年前）の『菅原傳受手習鑑』及び寛延元年（百八十七年前）の『假名手本忠臣藏』と並んで操芝居最高潮期の作品を代表する傑作なので、操芝居獨特の裏に裏ある脚色で全篇が綴られてゐる、眞に構想面白い作品なのです。初演は延享四年十一月十六日（百八十八年前）初日の竹本座で、竹田出雲、三好松洛、並木千柳の作になる五段續き、取分け、二段目の『渡海屋』に『碇知盛』、三段目の『鮨屋』、四段目の『狐忠信』は最も著名なる義太夫狂言として、およそお芝居に關心を持たれる方なれば誰しもヨツク御存知の名作、今更贅言を要するところでは御座りませぬ。

鬼一法眼三畧卷

前狂言と同じく義經記が背景となつて描かれて居りまする操淨瑠璃で、享保十六年九月十三日（二百〇四年前）より竹本座で上演されました五段續きで、作者は文耕堂、長谷川千四となつてはおりますが、一說には竹田出雲であるとの噂もあるやうに承つて居ります五段の內でも三段目の菊畑と四段目の大藏卿とが一等有名な場面となつて居ります爲、歌舞伎でも專ら此の場面のみが主として上演されて居る樣です。因みに歌舞伎での初演はと申しますると享保十七年三月（二百〇三年前）の大坂角座、同年九月の中座を以て嚆矢と致して居ります。鬼一、虎藏、智惠內の三人に、美しい皆鶴姫が絡むで、咲き揃つた菊畑の前で艷麗な、浮世繪模樣の樣々を描いて行くところ、菊畑の舞臺面は全く印象的な樂しさで、私達を歌舞伎の夢幻境に引入れて終ふので御座ゐます

正札附根元草摺

此の所作事の內容は朝比奈三郎が曾我五郎時致の力を試さんものと、五郎の鎧をつかんで曳くと云ふ力競べの叙景を表はしたものでその最も古い歌舞伎狂言と致しましては、貞享五年三月（二百四十七年前）江戸山村座に於ける『古今兄弟兵曾我』と云ふのですから隨分とお古いものて御座ゐます。その後元祿年間に入

歌舞伎狂言解題

りまして數回の上演を重ね初代市川團十郎と初代中村傳九郎の手に依つて此の所作事の根本の型が定まつたのだと云ふことです。爾來『草摺曳』の狂言は色々と作り變へられて世に出ましたて、その數も十二種以上にも及んで居りますが、今日傳存致して居りますのは僅かに四五種にしか過ぎず、就中此の『正札附』が一等多く上演されて居る樣です初演は文化十一年正月（百二十一年前）の江戸森田座に於ける『双蝶々假粧曾我』第一番目の大詰に書かれたもので、作詞は本屋宗七、立唄が二代目芳村伊三郎、作曲が四代目杵屋六三郎、振付が二代目藤間勘十郎、俳優は七代目團十郎と初代市川男女藏とで御座ゐました。眞に荒事氣分が横溢した名曲で、而も輕妙洒脫の味があり、よく江戸文化期の歌舞伎の俤を窺ひ知ることが出來るので御座ゐます

回 山姥（やまうば）

山姥の所作事も隨分數多く上演されて來たもので、十四、五種類を擧げることが出來ますが、多くは曲のみ傳存し、曲、型共に傳存致して居りますものは僅かに左の二種類なので御座ゐます。

（イ）月花茲友鳥……清元を地と致しましたもので初演は文政六年十一月（百十二年前）の市村座で『大和大和花山樵』の第一番目四立目に上演されたもので御座ゐました。作詞は二代目櫻田治助、作曲は清元齋兵衛、振付は松本五郎市の諸氏の手になるものです。

（ロ）薪荷雪間の市川……常磐津を地と致しましたもので、初演は嘉永元年十一月（八十七年前）の河原崎座で『東都内裡花良門』の第二番目大切に上演されたもので御座ゐました作詞は藤田瑳助、作曲は五代目岸澤式佐、振付は五代目四川扇藏の諸氏の手になるものです。

右二曲の内、後者は山姥物中でも最も著名なもので御座ゐまして、曲も非常に面白く、山姥物として完成されてをりますし、從つて上演回數も一等多い樣で御座ゐます。因みに『山姥物』の源泉を申上げてみますると正德二年七月（二百二十三年前）竹本座で上演された操淨瑠璃『嫗山姥』（近松門左衛門作）四段目の切がそうだと云ふことで御座ります。

▼右、日本文學辭典、歌舞伎細見、日本百科辭典、名著文庫に據る。

繁華街に近く……交通至便

閑雅な和、洋室！

モダン階上浴室新設

南地ホテル

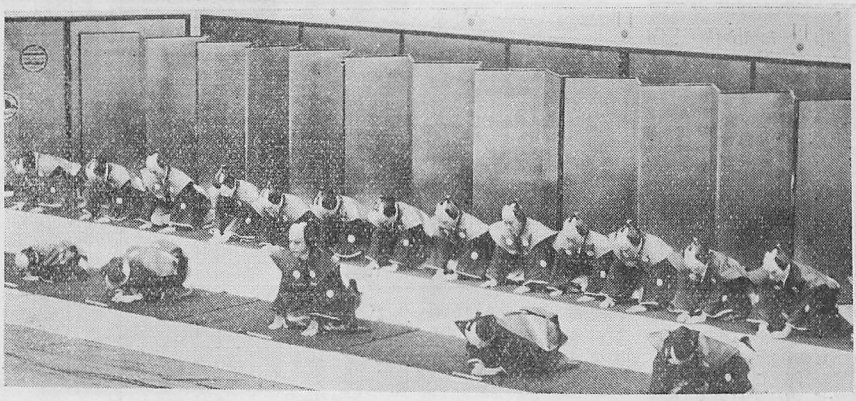
電話 南 四一四 四四一

宿 一泊 二圓半 三圓

憩 半 額

南海難波新地戎橋停前

十月の歌舞伎座



松島家一門萬歳

北川康男

名人仁左病めりと云へど、よき後繼者として、我當健在に意を安んじて可なりである。千代之助の昔よりその非凡な才と時代思想に目ざめた我當の藝界精進の熱と努力とは常に敬服に價するものがある。かつ加ふるに近來の彼の進境の著しさは喋々論を俟たない。數年來の劇界に於いて惠まれない、不遇、いはゞいつも日蔭にばかし廻つてゐた松島屋一門である、その不遇が恐らく彼をしてより以上の鞭撻の鞭となつた事は否めない、ソコに松島家のお家傳來の皮肉さがあり、何ものにも屈しない豪さがある、常識を備へてゐる我當、進境をもつてゐる彼、理解のある彼、舞臺になつかしみのある彼、名人仁左の血をうけた彼、こうしたものがしらずしらずに我當を大くしてゆく

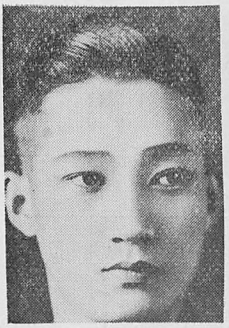
◇　◇

大阪を去て行つた我童であるが矢張り大阪人にはなつかしい人である、花形のない關西の劇界から我童が去つた事はより大きな損失であつた、そしてその淋しさは關西の劇界の淋しさとなつた、何と云つても次の時代の關西劇壇に君臨する一方の旗頭である、座頭役者である、ソコに我童に對する大きな希望と幸がかけられてゐたのであつた、本當に役者らしさのある彼である、淋しい仁左流の笑ひの中にも人間我童には舞臺の冷たさに似ぬ溫かさがある、幕内に珍らしい眞面目さがあるひとし、義直と云ふ二人のいとし兒に末子大輔の補導に餘念のない彼ではあるが、そして未だ花形として騷がれる魅力を彼は持つてゐる、それがちつと

も不自然でない、ソコに又我童の豪さがある、今度の大阪興行も彼にとつては思ひ出深いものである、ひとしの芦燕襲名と末子大輔の初舞臺の披露興行である、その輝しき門出に際して松島家一門の萬歳と二人の行先に幸多かれと祈つて止まないのである。

◇　◇

生れた土地、そして育ぐまれた土地初舞臺の懐しい大阪である、我童の愛兒ひとしはその大阪で父の俳名芦燕の襲名披露をするのである、歌舞伎座の中秋十月興行はその祝福すべき披露興行で一しほの賑ひを見せるであらう、洋々たるその前途を有してゐる芦燕である、女形の少くない劇界でその將來に最も大きな望みをかけ得る、芦燕である、紫陽花のような感じの流れてゐる彼である、人形的な、靜的なそして美しい味のある彼である我童の薫陶と



彼の努力でぐん〳〵と伸びてゆく芦燕の將來を樂しむは豈筆者のみならんや

◇　◇

いまこの稿を了らんとする時、來阪を傳へられてゐた吉右衛門が病氣はかばかしからず初日を旬日に控へて突如來阪中止となつて、折も折から一門の榮ある興行を陰ながら祝福して來阪してゐた仁左衛門が持前の氣骨から芦燕の口上に出場して挨拶をなし久さしくお目見得をしない大阪の御見物に風災の御見舞を述ぶると云ふことである、錦上に花、誠に聞くも床しき話である

これに依つて文字通りの松島家一家一門が顔を揃へる、彌榮ゆる松島家一門のその華やかなるオンパレード!!

すしやさ菅公

青田野風

折角膳立てされてゐた寺子屋と藤十郎の戀が突然吉右衛門の病氣休演の爲お藏となつて、その代り菅公とすしやが見られる事になつた。

別にどつちが何うと云ふ譯ではないが寺子屋は近年特に演す機會が多過ぎて又かゝと思はれ乍ら今度などは鴈吉の顏合せに鴈の松王が誰しもの話題になる所であつた。先年の顏見世で梅幸病氣の爲吉右衛門が急に出演する事となり、思ひ設けぬ源藏が見られたり、又一昨年の中座では成駒家急病で河內家代演の源藏が見られたり、とかくごてつく度に寺子家だ。松王ならぬ源藏が病氣ではお芝居にならない譯だ。だが決して失望するには當らない。何れこの二つの宿題は近い顏見世でうめ合せがつけて貰へるかも知れないから。

成駒家の權太は昭和五年の十月に道頓堀で出てゐる。續いて翌年の九月には京の南座で菊五郎が權太をやつて滿都を唸らせた事がある。江戸風のすつきりした權太は啖呵のきれる椎の木場と共に出す事によつてより多くの効果を期待する事ができるのである。が何と云つても權太の演所はすしやに盡きてゐる。義經千本櫻と云ふ淨瑠璃中の人物いがみの權太は所詮菊五郎や羽左衛門よりも鴈治郎や延若の血に縛がる人間である。

子供がやんちやする事をこちらではごんたを張ると云ふ江戸言葉の駄々つ子の事である。江戸系の權太と上方系の權太の相違は、恰度この駄々つ子とごんた張りの言葉の內容の相違だと云へる。

子供が物を欲しがつて無理を云ひ出す。賺めてもすかしてもきゝ分けなく果てはアン〳〵と泣き乍らせびり出す

『そないにごんた張つたら承知せエへんぞ。このくそ坊主めが』

と云つた調子で、この場合の權太は頗る惡い意味の形容をもつてゐるが、芝居の權太は歪み或は唖みと云つた二つ名を持ち惡人と見せかけておいて無類の忠義を盡すのである。芝居の權太が先か、ごんた張りの俗語が先かどちらか知らぬが、わが好漢いがみの權太の名譽の爲にこの言葉は再吟味されなければならない。

鴈治郎の權太は演る度に色々の意味で問題になつてゐる權太が權吉や權藏になつては野暮だし、權八になつては粋すぎる。それより私の案じるのはあの高齡で、樣子をきいたの暖簾口の出から花道へかゝる間の敏捷な動きと、首桶持つて花道へ入る迄のイキに體が持ちきれるだらうかと云ふ事である。勿論あの人の事だからその邊にぬかりのある筈はないが、痛々しい迄の努力が後日の健康に差支へるであらう事を怖れざるを得ない。

お里は宗十郎とかきいてゐるが、福助、我童、時藏とお里役者並びに維盛役者は多士濟々のこの際、一つ思ひきつて毎日替りと云つたやうな趣向に行かぬものかと望蜀の念にたへない。

壽三郎、彦三郎と梶原役者も揃つてゐるのに年寄夫婦が市藏、莚女（だらうと思ふ）だけとはやゝ心細い。梅玉璃珏、から、卯三郎、大吉、長太夫まで悉く亡き今日、次の時代には滿足なすしやが見られなくなるのではないかと云つたやうな杞憂さへ感ぜざるを得ない。

すしやについてはまだ〳〵書くべき事が幾らでもある。

が、今度は間際になつて狂言の搗き代へや何かで何うやら焦燥の氣味もあるし、筆者も間に合せの限られた時間なので考を纒めてゐる暇がないからこれ位にしておいて次は菅公である。

寺子屋の代りに菅公が出た。何れも天神樣に緣のある點で見物に御辛抱を乞ふ意味か。

これは大正八年の顏見世に出て以來のもので大森痴雪氏の作品である。

菅原傳授手習鑑の道明寺の場でみる鴈治郎の菅相烝はその押出しの立派な事と品位の高い點で定評があるが、凡そ公卿ものと稱する束帶姿の役は貫目を第一とする點で、ごく少數の座頭役者でないと何う努力しても寫らないものだ單なる藝歷や顏形の上だけで演れるものと思つたら大違ひその意味で今春の歌舞伎座に弘法大師を演じて氣稟

の高さを見せた成駒家は、そのまゝで又道實公たり得る資格を完全に具備してゐると云へやう。

筋は何でも道明寺の段を新しく解釋したものであつて、竹本を使つた新作物流行時代の形式を用ひて、宗行卿と共に上品な成駒家灯の十八番物として各地で上演されてゐる。

曾根の濱邊の松原を背景に、黑い牛に乘つた道實卿の白い束帶姿、その口取りの曾根の翁は故梅玉だつたがこれが又無類の出來で、宗十郎の櫛姫と共に繪のやうな舞臺面だつた事を十六年前の記憶の中に想ひ出される。

新釋道明寺

高谷　伸

出雲の「菅原傳授手習鑑」の道明寺の場、それを史劇風に書き直し綱敷天神の故事を描いたものが「菅公」である

作者は渡邊霞亭ではないかと思ふがはつきり記憶しない。書き卸しは大正元年十二月京都南座の顏見世で、菅公はいふまでもなく鴈治郎だつた。それは翌年の丑歲をあてこんで、丑にひかれて善光寺ならぬ道明寺の新釋となつて、正月の浪花座から二月の新富座と三ケ月に亘つて三都をうちつゞけたもので、その頃はまだ繪卷風な絢爛たる姿態が珍らしかつた。

內容は菅公配流の途上、反對派から曾根の松人に殺させやうとしたが、逆に松人が弟妹の手にかゝつて死ぬといふ風のもので、この松人が今の坂東壽三郎が長次郎から改名の披露役だつた

長次郎といふ名はその頃から二枚目向きだつたか如何かはしらないが、壽三郎も長次郎時代はぎこちない二枚目をあの身長で勤めてゐた。その頃は丈は高かつたが今のやうにがつしりしてゐなかつた。それが松人といふ手强い役に廻つてウンと男をあげた、壽三郎としては改名記念の役であると共に、出世役でもあつた。

鴈治郎の菅公は氣品だけで見せる役だが、その藝風から見て、その後の道明寺の菅公より上位にあつたことゝ思ふ。

松人を殺す妹は故人雀右衛門の芝雀時代で役名は櫻子、東京ではたのみと改めた。松人の役も東京では多紀彥となつてゐた。

弟の方は子役時代の扇雀で、阿古丸がその役名、意氣の壯なのを東京でも褒められ將來怖るべしと言はれた。

この三人が松王梅王櫻丸の穴でもあり、松人は松王と宿彌太郎を兼ねてもゐた譯である。三人の親の曾根の翁が故人梅玉で見るからの好々爺で白太夫

とはまた違つた味である。判官代照國に相當する藤原の善友と藤原の眞興が福助と長三郎、刈屋姫の穴の柵がその頃の中村雁童で、この役割は三都とも動かなかつた。

その後再演された時には、舞臺裝置に、ぐつと繪卷調が加へられ衣裳と共に、さうした効果がさらに增したものである。

鴈治郎吉右衛門の寺子屋がおくらになつた代りに、この新釋道明寺の菅公どちらにしても、菅公に替りはないとも言へやう。

山田美妙と祇王

小泉苓三

1 春秋平家物語と祇王

大阪歌舞伎座十月興行の春秋平家物語は山田美妙の原作白拍子祇王を脚色したものである。美妙が四郎高綱、二郎經高、三郎盛綱等々の歴史小說を書いたのは明治四十年前後であつたと思はれる。白拍子祇王もこの頃の執筆である。

長く市井に埋れてゐたため一部からその存在を疑はれてゐたのであるが、最近偶然にも京都立命館出版部より發行せられるにいたつたのである。

2 美妙と歴史小說

美妙の歴史小說は前記の外にも同じく平家物語より取材した小宰相局、六郎景澄等がある。彼の歴史小說に於ける共通の特色は主情的な心理描寫の手法である。それまでの歴史小說といへば筋書を複雜にしたり、種々な變つた事件を持出したりして讀者を引張つてゆくのが普通であつた。それを美妙は作中の人物の心理展開におきかへた。從つて彼の歴史小說のテーマはどちらかといへば簡單である。

その代りに作中の人物の心の動がそのかすかな陰影までも細かに描かれてゐる。これは明治文學史上に於ける歴史小說の劃期的な進展であつた。

3 祇王と清盛

祇王及佛御前は平家物語のうちにあつても特に感傷をそそる一挿話である「祇王祇女は當時の白拍子美くしい容貌と勝れた歌舞によつて京洛にその艶名をうたはれてゐた。清盛は日本人としては珍らしい强情我慢の英雄、その自我の强烈さにいたつては他に比肩し得るものを見ない。現在の歴史の上の彼は著しくゆがめられてゐる。その生命の燃燒るすところ天下何物をも燒きつくさなければやまなかつた有樣はむしろ凄絶の感をさへあたへる」さういふ逞しい男性と可憐な女性との情話を骨子とし、さらにこれに佛御前を配

して、戀愛三角形の繪卷を展げて行く所にこの物語の永久の美しさがある。

4 美妙の祇王

美妙の心理描寫が、ここではまことによく生かされてゐる。また生かしい素材でもあつたのである。六波羅に於ての祇王と佛御前この葛藤及び洛西嵯峨に於ける尼の生活は本篇の二つのヤマである。且つ春秋平家物語がこの六波羅、秋の嵯峨をとつて一幕二場に脚色せるはまことによく原作の俤を傳へたものといへよう。人生ついに無常、驕る平家も久しからねば、淸盛の寵を奪ひし佛御前も久しきをあたはず、いづれか秋にあはでやむべきの歎はいつの世にも變らぬ人間衷心の聲である。

5 山田美妙の一生

美妙は、二十歳にしてすでに東洋のシェクスピアの綽名を得た明治の天才である。しかも三十歳にして輕薄文士の名をうたはれ、四十三歳にして日蔭者として寂しく死んで行つた。しかも彼は二十才から二十四才位までの間に明治文學史上に殘る大きな仕事を幾つも殘してゐる。もし明治の文人を表彰するとすれば、彼こそその〃言文一致運動〃によつて第一に認められていいしかも彼は不遇のうちに一生を終へたのである。本月二十四日は彼の二十五回忌にあたる。この秋にあたつて、彼の作が上演せられるにいたつたことは何かの因緣がなければならない。地下の彼の靈に手向けるこれ以上のものはないであらう。

菊畑の謠曲味

森 ほのほ

芝居と能、淨瑠璃と謠曲とは切つても切れない緣の絲でつながつてゐる。お國歌舞伎の抑始めから能（謠曲）や狂言の眞似をしたり、暗示を得たり、材料を取入れたりしてゐるのである。それが時代が大分經つて大近松が現はれるとなると、その作物と能、謠曲との關係は愈々濃厚さを增して、趣向にも文章にも盛んに材料を仕込んで、或時は燒直し、煮返し、或時はおなまの儘で取扱つて、自由自在の料理按排、庖丁の冴えを見せてゐる。

偉大な近松に私淑した後の作者達が同じやうに能、謠、狂言から暗示を得たり、材料を頂戴したのは、當然のことかも知れないが、この『菊畑』――『鬼一法眼三略卷』の作者文耕堂松田和吉も亦ご多分に洩れないのである彼は近松が『凱陣八島』の第二段に謠曲の『勸進帳』を、第三段に同じく『攝待』を、第四段に狂言『花子』を取込んだやうに、第三段―鬼一の館で謠曲『鞍馬天狗』を、第四段―大藏卿

の條で狂言小舞を、第五段で謡曲『橋辨慶』を取入れてゐる。殊に三段目の鬼一法眼を鞍馬の大僧正と同一人物だと、合理的に胡麻化したところが面白い。この三段目、鬼一館が即ち謂ふ所の『菊畑』である。爰に盛られた謡曲味を以下少し述べることにする。

虎藏實は牛若丸が兵法の秘書、六韜三略の虎ノ巻を手に入れたいばつかりに鬼一方の下僕となつて、娘皆鶴姫の草履まで摑んでゐる。この趣向は無論、太閤の草履取を利かせたので、いづれ一世に時めくことを暗示したのだらうが、同時に張良が黄石公に落した履を捧げて、兵法の奥儀を傳へられたといふ話を巧く嵌め込んだのである。この話が謡曲の『鞍馬天狗』の中にも引用されてゐる。文耕堂は材料に使つた『鞍馬天狗』から更に材料を見付けた譯である。

鬼一法眼の父は源氏方であつたが、自分は現在平家の祿を食んでゐるので昔鞍馬山の大天狗、僧正坊と名乘つて兵術を授けた牛若に、再び同じ姿で見えて、六韜三略の虎ノ巻を讓り渡す。この僧正坊の姿は『鞍馬天狗』の後ジテその儘で、白毛の頭の大兜巾、厚板の着付、給狩衣（或は水衣）、大口（或は半切）といふ拵へ、大羽團扇を持つた異形で、牛若、鬼三太ばかりでなく見物を驚かさうといふ趣向なのである

順序は前後するが、鬼一が言ひ懸りを付けて鬼三太の智惠内に牛若を杖で打たせる條は、謡曲『安宅』即ち勸進帳で辨慶が强力の義經を金剛杖で打つのを轉用したので、辨慶は謂はば自發的に決意して打つのだが、智惠内は强請されて、餘儀なく主君に杖を振上げる違ひがある。併しそれに依つて相手の疑惑を解き、自分等の素性を隱さうとするのは一つである。

それから、虎藏の牛若が湛海を二つに斬るのは、謡曲『烏帽子折』で同じ牛若が熊坂長範を斬り倒すのを臭はせたので作者が相當に工夫を凝らしてゐるのが分かる。なほこの段切レ近くの地の文に『西海四海の合戰と言ふとも……』以下、『鞍馬天狗』のノリ地の文句を生かして嵌め込んである。

かやうに『菊畑』だけでも、『鞍馬天狗』を第一として、『安宅』、『烏帽子折』といふやうに牛若、義經に關係ある謡曲から材料を探つて、手際好くそれを嵌め込んでゐる。そして前にも述べたやうに、五段目の五條ノ橋の場には『橋辨慶』を、其他の段の隨所々々にも、これら謡曲中から文句を拔出して、それを地の文の中に用ひてあるなほ、庭掃除する智惠内は、謡曲『田村』の前ジテ――花の木蔭を清める清水の童子を聯想させることを附け加へて置く。

松旭齋天勝嬢は語る

Z・Z・Z

明治、大正、昭和の舞臺生活三十八年、萬年娘と持てはやされた奇術の女王松旭齋天勝嬢は、今年の三月引退を聲明し、その十九日より、新橋演舞場を振り出しに、各地にサヨナラ興行を續けてゐる。大阪では九月二十三日より中座に二度と見られぬ華やかな舞臺を見せてゐる。

さて――「魔術界の女王」から一介の女性中井かつにかへり、サヨナラ興行を終つて――（多分二三年はかゝるとのことデス）丸の内有樂町の旅館水明館の女將となる、彼女には數々の思ひ出があらうと、開演中の中座樂屋に訪ねる――

何故魔術師になつたか

十一の歳から四十九のけふまで、約三十八年の舞臺生活です、私の家は神田富松町の質屋でしたが、零落して、深川へ移り、十歳の時に、藝者屋の誘惑におちて、そこへ行く樣になりましたが、幼心にも、藝者は嫌だと思ひ茲を三日で逃出し、藥研堀の或る家へ女中奉公に行つたのです、これが計らずも師匠天一の家で、見樣、見眞似でやつてゐる内に師匠の言葉もあり、その翌年まで勉强して、初めてステーヂ

を踏みました。

伊藤公と私

師匠につれられて初めてシヤドルへ行つた時のことです、丁度、公爵伊藤博文さんが來ておられて、日本領事館で歡迎の宴が催されました。

師匠の天一と私はその餘興場へ招かれ、いよ〳〵舞臺にたちました。が、私の奇術のたま投げは、室内が狹くつて不十分でした。

然し「えゝまゝよ」と思ひきつて力一杯投げましたが、コツンと大きな音がしてたまが戻りました。

見ると公爵はさり氣ない顏をして、頭を左手でおさへてゐられる——さてしばらくの後、別室の宴席にて公爵はいきなり、

「天勝、お前は偉い奴ぢや、わしの頭へものを投げた奴は一人もないぞ」

と案に相違のお褒めの言葉、さうして、早速あり合せの、テーブルかけのリンネルの布に、

春夏秋冬一手之中

應天勝女史之需、　春畝山人

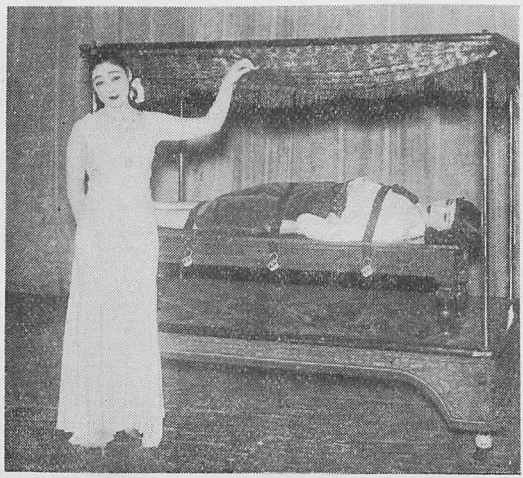
と立派な文字を書いて下さいました。そして「落欵は日本へ歸つてから押してやらう」

——その後歸朝して見ますと、どうでせう、公爵はハルピンで悲壯な御最期、惜しいことに御判は遂々頂かれませんでしたが、今ではこれを家寶にして居ります。

お茶漬と美身術

天勝は若い——とよく云はれますが私は別に、特別な不老長壽の藥など飲でゐるのではありません。

それよりも氣持を何時も朗らかにすることです、これが齡をとらぬ秘訣と



信じてゐます、又、私は旅から旅の生活で、氣分轉換がたやすく出來ます、これも齡をとらぬ一つの理由でせう。

しひて、私の美身術、健康法と申せば、努めて胸を張るやうにしてゐることです、これが體の衰へを見せぬ第一のコツで、よく他の方々は食物に關係があると云はれますが、私はガフ〳〵お茶漬ばかり食べてます、――或はお茶漬ガフ〳〵がよいのでせうかね、顏へはフランスものゝ粉白粉を使ふきりですわ。

ニセ天勝横行記

世の中は愉快なものですね、私をニセ天勝だつて訴へた興行師さんがあんのよ、その時ばかりはほんとうにあいた口がふさがらなかつたわよ、――檢事局に呼出しを食つたりしました。でも中には罪のないニセ天勝も居ます。朝鮮で公演中のことですけど、ニセ天勝が――ホンものは自分で松旭齋天勝はニセものだ、第一、二圓何がしの入場料は高いから、ウントまけて、十錢で見せるなんて云ふんでせう、これには腹も立てられないぢやありませんかとてもこれには笑ひましたわ、ニセ天勝は大抵、松竹齋天勝、美天勝、小天勝などと名乘つて居ります。

二代目の天勝に就いて

私――二代目の天勝を出さないつもりなんですが、藝の點では私以上の弟子は居ますけれど、さて、座員の統率が出來るでせうか、舞臺は集團生活ですからね、とてもこの問題は難かしいです、舞臺の技倆よりこれが一番の問題です。

私はこのために、恩師天一亡き後は青春も戀もなにもかも犧牲にして戰つて來たのです、この私と同じいばらの道を歩けるものが果してあるでせうか――舞臺生活三十八年長い樣でも短いものね。私、若い頃から五十になつたら引退すると心に誓つてゐたのです。

お金が出來たの、身體が衰へたのと云はれるのはデマです、唯、私は「五十歳引退」が私の念願で唯それを實行したに過ぎません。藝術には年はないが女性には年がありますもの……。

×

さて――中井かつの本名にかへつて今後彼女は何をなすか、旅館の女主人として、納まるかどうか、そこに期待と興味がある！

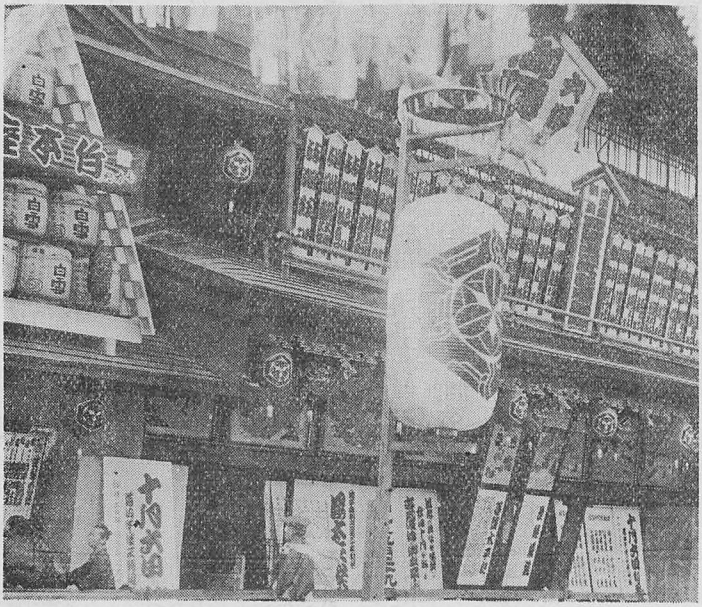
天勝よ！サヨナラ！

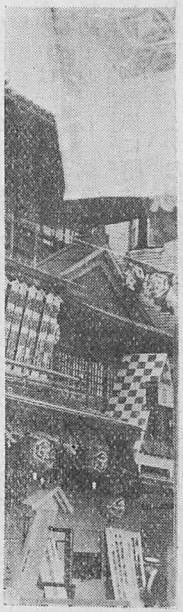
天勝よ！サヨナラ！

× × 義太夫節發唱

二百五十年

記念興行に就て × ×





木谷蓬吟

竹本義太夫が一流義太夫節を始めて發表した貞享元年から數へて、今年がちやうど二百五十年の意義ある年に當つてゐる。而かも其發表の竹本座が現に浪花座の位置である關係から、こゝに進出して其二百五十年記念興行を試みるのは感興更に深いものがある。その撰ばれた藝題も、義太夫が旗上げ第一番に上演した『世繼曾我』と、彼が圓熟時代の代表的語り物『碁盤太平記』であることも、文句なしに頂戴できる。

いづれも大近松の作であるが、世繼曾我は曾て宇治嘉太夫に與へた舊作だが、非常な好評を博した折紙附きで當時作者自信の作であつたらしい。然かし勿論謂はゞ古淨瑠璃に屬するもので、これを碁盤太平記に比べると、荒削りの觀があり粗野で未熟で、劇としての價値には劣るところはあるが、相對照して、そこに古淨瑠璃の古雅なおほやうな

古典味から、寫實の多分に加はつて來た當流（義太夫節の稱）發展の史的推移の跡が窺はれて、研究家には興味があらう。

但しこれは原作を讀んだ上だけの感想で、果して節調づけられ床に語り現はされて、この想像が活きるものか、どうかは自ら別問題であらう。

こうした觀點から云ふと、世繼曾我の節付けは、大まかで、フシ少なに、技巧を弄せず、主として語りのあしらひと云ふ心持ちであつて欲しい。それは原文を讀んだだけでも、碁盤太平記などゝは大に違つて、物語り風であり、古淨瑠璃臭の濃厚なものであることが判るだらうと思ふ。

語り方も、寫實や理屈ばかりは避けて、おほやうで自然で、所謂元祖義太夫の音吐朗々型を目標にしたいものだと望むが、そんな事は今の時代に不可能だと一蹴さるればそれまでゝある。

然かし私は、きつと出來得ると云ふ自信を持つてゐる。史的な初代義太夫時代の再現といふやうな六つかしいことではなしに、いかにも元祖時代らしい、古淨瑠璃らしい、と云ふ雰圍氣だけは、再現し得るものと信じてゐる、それで結構であると思ふてゐる。

私の所藏朱章本の中に、古淨瑠璃『自然居士』がある、作者不明だが元祿三年竹本座で元祖義太夫の床に上つたものである、この節章は上演當時のものでは無いとは思ふがしかし近代の物とは異つた古風な稚拙な所謂古淨瑠璃らしい味を持つてゐる、恐らく比較的古風を持ち傳へた珍しい一曲であるらしいが、曾て某太夫に試演させて其古曲味に空想を蘇らせた經驗を持つてゐる。このイキから推し、また世繼曾我の原文を洞看して、それがたとへ空想的ではあらうけれども、元祖義太夫時代の床を髣髴させることは至難の事でもあるまいと考へる。

折角、今度の舞台が、世繼曾我に限つて、古風に則り太夫三絃の床を舞台正面に設け、背景なく置道具式の裝置で人形を使はせると云ふ設備になつてゐるのであるから、特に此一場だけは太夫も絃も人形も、思ひ切つて古風な味を出して貰ひたいものだと思ふ。

人形に就ては、太夫の床の前面で使ふのであるから、出來得れば一人遣ひの昔に返へり（助手を使用する程度で）技巧を遠慮し、寫實を避け、『虎少將十番斬』の景事も、後代の物語風に墮せず、能舞の影響濃厚であつた當代を參考して、大まかな振を案出するなど、その他いろ〳〵あら

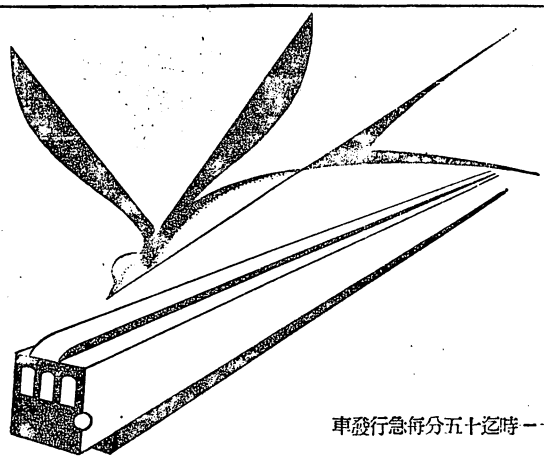
う。

次に、碁盤太平記、大星閑居の段は、義太夫五十六歳、近松五十四歳の孰れも圓熟期に入つた頃の作品として（世繼曾我は義太夫三十四歳近松三十二歳の作）、これは後代の物と大して異つてゐない作柄であるが、ムダのない而かもよく行き屈いた筆法で描かれ、各人物も鮮やかに描かれ、一幕で旨く纏つた佳編である。元祖義太夫を偲ぶ出し物としても恰好のものである。

特に義太夫の藝格から見て、岡平死んでの後段に於ける力彌の母が意見交りの長物語――力彌の幼時に主君の滕で小水を洩らした逸話など――及び由良之助が心にもない雑言の詞などに、彼れ獨特の妙味を漂はしたに違ひない。長い詞のハヽヽヽの中に、地、色など巧みに挿入して變化を付け單調平板に流れる弊を避けた苦心の痕は、院本の符註を見ても想像できやう。

やがて竹本座の舊趾（浪花座）には義太夫節創唱二百五十年の記念興行が開かれる、その初日には見物して吾等の空想やら認識やらを清算したいと樂んでゐる。（九月末）

燕よりも早い京阪特急四十分



朝七時より夜十一時迄十五分毎急行發車

京都四条　京阪電車　大阪天六

「あゝ吉河先生」

鳥江銕也原作

角座新派劇上演

「昭和九年九月二十一日、牢記せよこの日！この朝！近畿の空を通り魔の如く、未曾有の大颶風は町の、村の此處彼處に悽惨な暴虐をほしいまゝにして、哀れ幼兒の生命を奪ひ、傷つけまたは一家族が倒壞家屋の下敷になるなど、數限りない悲惨事を現出した。その瞬間の人類悲劇の中に生れた美はしい話の一つ」

フューネラル・マーチにつれて、此の序詞が終ると、此所は大阪府豊能郡豊津村の田圃の中に建てられた吉河先生の家である。

お芝居の手引（三）

山川聽雨

（八）お芝居の種別

歌舞伎狂言を分類しますと、凡そ義太夫狂言、時代物、世話物、活歴物、所作事の五ツに分類出來ると思ひます。左にそれらの一ツ一ツに就いて説明申し上げませう。

1　義太夫狂言

これは一名院本物とも云ひ、人形淨瑠璃をそのまゝ舞臺に移植しましたもので、當然の結果として義太夫が狂言の骨子となつて居るのが特長であります。大體人形と云ふものは、全然口を利くことが出來ませんから、自分の感情を表現するには、どうしても顔面の表情、體全體の動作に依つてのみ表現せねばならぬ關係上、その動作なり表情なりを誇張して見せなければならない必要があるのであります。そしてこの人形芝居を歌舞伎として上演した場合、矢張りこの人形の型をそのまゝ取入れることにな

朝――五時半頃。まだ薄暗い外には氣味悪い雨風が叩きつけてゐる。先生は早や起出て臺所で朝餉の用意をしてゐる。

先生は夫と數年前に死別してから、その娘の牧子のために、郷里から妹の八重子を呼び寄せ、誰の補助も受けず男になつた氣持で、小學教員の薄給に甘じて、只管兒童の教育にいそしんで來た刻苦勉勉の人である。そして先生は中學教員になつて、牧子に中學教育を受けさせたい理想を持つてゐた。

近所の青果商かね新が、市場へ仕入に行く途中、ふと吉河先生の家の開いてゐるのに氣がついて、先生の日常に讃詞を浴びせる。そこへ、同じ教員住宅に住む石橋先生がレインコートに長靴と言ふ雨支度で誘ひに來てこの暴風雨で學校の事を心配げに語るが、

「ぢや吉河さん、お先へ」と出掛ける食事を濟ませた先生が出掛けようとしてゐるところへ、風に傘を取られた二人の兒童が、逃げる樣にして駈け込む。先生はその二人を雨コートの中へ抱へるやうにして、暴風雨を冒して登校する。八重子と牧子は、これが最後となることゝも知らず、ぢつと先生の後姿を見送る。

七時半頃、六十米突の風速で、荒れに荒れた大暴風は、遂に舊校舍を搖り動かし始めた。窓のガラスが割れる。瓦が飛ぶ。塀が倒れる。

「早く逃げなさい、新校舍へ行くんですよ」

吉河先生は、他の訓導と力を併せ、必ず死になつて叫んだが、八時十五分、遂に舊校舍は轟然たる大音響と共に崩壞する。

りまして、それが今日迄傳はつて居るので御座ゐます。「假名手本忠臣藏」「菅原傳受手習鑑」「義經千本櫻」「心中天網島」等みな義太夫狂言に屬しまして、作者には、近松門左衛門、竹田出雲、近松半二、並木宗輔三好松洛等の作品を多く見受けます。

2　時代物

義太夫狂言が人形を主演とし作られました淨瑠璃から出發してゐるのに對しまして こゝで云ふ時代物とは、最初から人間（俳優）を相手として作られた時代物の脚本を指すのであります。これはまた左の三種に分類することが出來ます。

A　王朝物――とは奈良朝より平安朝に至る時代を背景として描かれて居ります時代狂言で、源頼光、平將門などの人物が登場する脚本が比較的多い樣です。

B　普通の時代物――とは時代を源平時代から德川時代に採りました狂言を指しますので、大抵物語の骨子は「謀叛」とか「お家騒動」とか云ふことに仕組まれてゐる樣です。或る人なぞは此の種の時代物を、特にお家物と云ふ名稱を付してゐる方があります。

一般時代物の作者としては、並木正三並木五瓶、鶴屋南北、奈河龜助、櫻田治助等有名なものであります。

C　荒事――これは一種獨立したものとして取扱つた方がいゝかも知れませんが、書き下し當時は今日の樣に一幕だ

芝居物語

村民總出で倒壞校舍から兒童を救出し始めた。やがて吉河先生の死體が發見された。吉河先生の死體を取除くと奇蹟！　先生の下にピン〳〵した子供が五人もゐるではないか！先生は身を犧牲にして尊い五人の幼い魂を救つたのである！

その日も暮れて、電燈のつかない先生の家では、濕やかなお通夜が營まれた。奇蹟的に命拾ひをした兒童も來た折柄、心憎いまでに冴えた十三夜の月が、さツと指し込む。……

カット寫眞說明

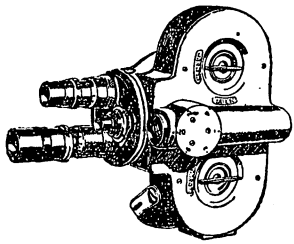
吉河先生…瀧　蓮子
青果商かれ新…都築文男
妹　八重子…若葉蘭子

フィルモ

十六ミリ界の最峰高

未だ曾て**フィルモカメラ**で影して失敗があつたか？

未だ曾て**フィルモカメラ**で一呎のフィルムが浪費されたか？フィルモは映畫になると同時に最も優秀なるカメラマンを兼ねボタンを押し給へ貴下のなされる事は唯それだけだ



(全國一流カメラ店にあり　グロタ呈進)

BELL & HOWELL CO. U. S. A

け切離して上演したものではなく、時代狂言の一部を爲してゐたものでありますから、此の種類の內に差し加へた譯であります。荒事とは元祿時代の名優初代團十郎、二世團十郎が創始した云へば英雄崇拜劇とも稱すべきものでありまして、その剛勇無比の舞臺面や演出法は、今日でも未だ脈々と波打つて、私達を痛快にして呉れるのであります。そして江戸末期に至つて七代目團十郎が歌舞伎十八番と名打つて大成したので御座ました。

3　世話物

「玄治屋」と云ふ芝居があります。皆樣がこれを御覽になりますと、既に古い時代の出來事として御覽になつて居ります。しかし、此の狂言の出來た當時には立派な現代劇であつたのであります。乃ち世話物とは、前述の時代物が時代劇であつたに比してこれは現代劇であると云へるのです。ですから原則として全て寫實を主とした演出法を採つて居る社會劇なので御座ゐます。

世話狂言には脚本の上に一定の約束がありまして、濡れ場、殺し場　ゆすり場、責め場、世話場などの舞臺によつて綴られて居るので御座ゐますが、ゞの舞臺面を看ましても、其の時代の社會の色彩が横溢致して居りますことは、右に述べました理由に依つて明かである譯であります。

（次號へ續く）

堂本寒星著（最新刊）

上方演劇史

近世日本のあらゆる文化の流れは上方と江戸の二つの流れとなつて發展してゆく。就中、上方に源流を發した歌舞伎の如きは、この兩者に於て明かに相異つた二つの世界が對立存在するのである。而して從來の歌舞伎の研究は多く江戸演劇に偏した傾向があつた。上方演劇は煩些なもの、難解なものとしてむしろ研究の彼方に置かれてしまつたかの感がなくもなかつた。人と機會を得なかつたのである。さればこそ、上方に重心を置き歌舞伎の發生から現代に到る近世日本演劇の史的展開を叙述した「上方演劇史」の出現は、學界の多年渇望してやまなかつたものである。著者はさきに「京都の歌舞伎」を著はしてその博識の一端を示し學界からその後の研究に多大の期待をかけられた學徒、且つ又久しきに亙つて上方演劇の實際に携つた經驗家でもある。今、その蘊蓄を傾倒してなれる本書は正に近世文化研究の上に炬火をかざしたものといふべきである。

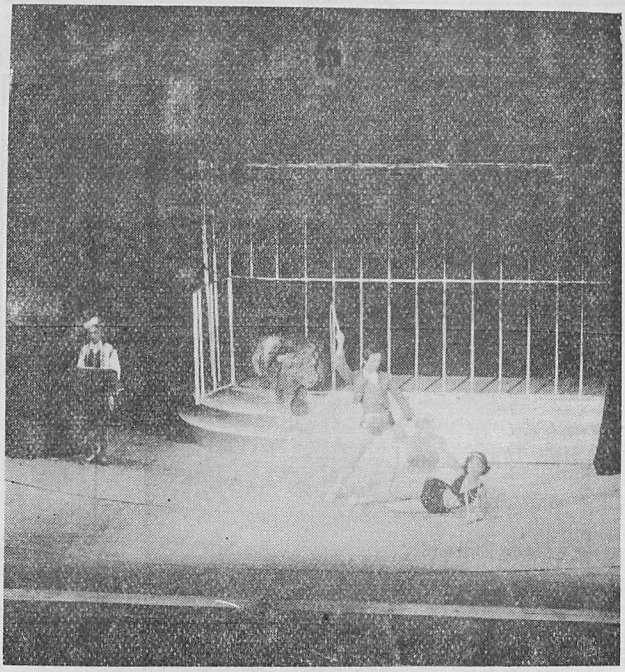
裝幀　堂本印象畫伯
木版　二十三度刷總絹裝美本
本文　三百十七頁、索引付挿繪八十枚
定價　金五圓　送料　貳拾貳錢

發行所　東京・日本橋通三　振替東京一六一七番　春陽堂

女軍進出！

―O・S・S・Kの第二回公演―

股野慶次郎



卿等まことにレヴューを愛好すと云はんとせば、その場所を必ずカブリツキと定むべきなり。即ちそこにあらば、卿等の頭上いと近き處に跳躍する、卿等のエンゼルの肉感美は遺憾なく窺はれ、膩肉と脂粉の香ばしき匂ひは、卿等の精魂を天國に遊ばしめ、法悦の極致に達しむせべければなり。もつとも此の時は多少仰ぎ見ることの苦痛とものふべけれど、そは卿等のエンゼ

『青春の花束』

・・・歌詞

―A―

君にさゝげん花束
胸に抱けばおのゝき
乙女心はふるへて
さだめなく惱ましや
何處いつの日捧げん
熱きおもひをこめにし
夢の花ぞ
青春の花束なれ

―B―

君にさゝげん花束
薫優しく秘めやか
燃ゆる想ひ赤く濡れ
まばろしか美しや
何處いつの日捧げん
哀れ乙女のねがごと
赤き花ぞ
青春の花束なれ
あゝ
あはれ憧れのねがひ

ルへの絶大の奉仕と知るべきなり。また卿等、眞のレヴュウ・ファンなりと、已れも他も信じ、信ぜしめんとせば、常に座すべき椅子を決定すべし。かゝる時は、卿等のエンゼルまた、卿等を印象せんこと、疑うべくもあらず。まことに〳〵レヴュウ・ファンの悦び之に過ぐるもの他に求むべけんや。エーヘン

もし、モダン聖書なる粹な典籍が出版されてるとしたら、レヴューの章項には、まあこんな調子で規定されよう、と思うのでアル。

エロトロジイの泰斗丸尾長顯ウジは……彼氏は往年寶塚少女歌劇のスターもゝ敷しのぶ孃の愛人であるデス……やはりレヴューのカブリッキ黨の一人で、常に脚線美に垂涎しとると、自ら書いてゐるがほんとのレヴューファンならこゝまで徹底しなくては駄目である。笑はゞ笑へ！いやにクソ眞面目くさつてるインチキどもに、此の味が解つて堪るものか！おゝ青春の醍醐味よ！

とは書いたものゝ、筆者のボクも、その勇氣は恥かしながら、未だに持ち合さないのである。しかし、松竹樂劇部の昔このかた、春のおどりには三日にあげず、ステーヂま近の椅子に埋もつて、踊り子の誰彼の美しさに、醉ひしれるだけの勇氣はあるボクなんである。

ではOSSKの中で、誰が一番美しい？殘念ながら、エロトロジイの研究家ではないボクには、決定的には判定できないのである。

誰も彼もが美しい！月丘松子の丸まつちい顏、すんなりトウ・ダンスに適した足、それもヨロシイ。雲井八雲子の少しセンチなメーキャップ、それまたOK！國友和歌子の豊滿な曲線……OKOK……お目々の碧い、赤いモジャ〳〵毛の小父さんや小母さん方の話では、日本人ほど批評の好きな國民は無いそうな。もつとも、此の檢討好きの習性が、我が帝國の强大さを築き上げたのではあるが、我が

『花賣娘の歌』

・・・・歌詞

眞白の手に摘む
赤き花びら
戀のおもひは
優しき匂ひに
激しくこもるよ
召しませこの花
今宵のなやみも
この夜のゆめも
この花びらに

あなたの手に持つ
青き花束
小さくふるへて
心をおどらす
乙女のなげきか
召しませこの花
乙女のねがひも
こゝろの露も
この花びらに

OSSKファン諸クンは、少くともレヴュウ見物にだけは此の習性から解放されてほしいのでアル。よろしく理窟つぽい態度なんか揚棄して、刹那々々の淘醉に、百パーセント浸つてほしいのでアル。こせ〳〵したアラ探しは、シックなレヴュウ・ファンの恥と知れかしでアル。豪華絢爛の美、裸のあんよオン・パレの咽ぶばかりのアトモスフィアに、身も魂も淘然となり得す、しかつべらしく、批評がましい言葉を羅列するようでは、とうてい、我がOSSKの娘さんとは、仲よく出來んデスゾ。シカルニ、OSSKの第一回公演カイエ・ダムールにも、短期公演の河原涼子の「驚娘」にも、ファンの中から隨分「見ちやアおれんデス。何うして寶塚とあんなに違ふでスカ」との嘆聲と非難と、侮蔑とを、ゴツチャにした意見のようなことを聞いたのである。しかし、それの全てを、OSSKの娘さん達の努力不充分に歸するのは甚だ酷である。彼女たちは熱心に汗みどろの勵みを見せてゐるからだ。少くとも、レツスン・ホールの日々の有樣を參見したものなら、彼女らの精一杯の精進には、涙ぐまづにはゐられまい。その努力の中から芽生えた第一回公演の評判が、一部分だけの人々からにもしろ、とや角と、良くない批評を蒙つた彼女らは、更に疲勞を征服して、こゝに華々しく第二回公演を出したのだ必ず見ごたえのする舞臺を見せて呉れようと期待してゐる殊に關西人に適した舞臺たらしむべく、レヴューには珍しい、一貫したストーリーを持たせた、ネオ・ドラマチツクと角書を付けた物々しやかな「青春の花束」である。原作は關西劇作界の一方の人氣男鳥江鐵也クンである。既に原作だけでも興味が持てそうである。そしてまた、OSSKを指導するのが、我が劇作界の老功大西利夫氏である。これは何うしても、第一回公演よりも、良くあるべき約束の上に置かれてゐるようだ。ケダシ今まで、お芝居をしなかつた娘さんの、誰も彼もが、初めて劇的に動こうとするのである。多少の杞憂はあつても、OSSKファンには、それだけでも、大きな興味の標でなければならぬ。何うか前にも倍した成功が望ましい。

初日からドシ〳〵と、カブリツキは勿論のこと、一階、二階、三階が超滿員となることを祈る。たゞし大劇の宣傳と思つて貰つちや困る。ファン諸クンの推賞する、美しき彼女たちの喜びを大きくしたいからでアル。（九月廿七日記）

雲井八重子――かますごーこれは自稱であります、成程そう言へばカマスゴである。よく自分を知るかしこい子です。

讀者投稿

新國劇論

葛原康好

從來、新國劇の人々がよく一丸となつて刻苦精勵、奮闘たゆまざるその努力、生氣潑溂たる若さに滿ちた意氣そのものに常に敬服し、其處に又この劇團の未來ある生命を感じさせられるのだが、新國劇の昨今の人氣を見るにつけ、フトこの劇團も漸やくマンネリズムの渦中にある惱みを、惱んでゐるのではあるまいか……とそんな危惧が腦裏をかすめる樣になつた。澤正逝いて後數多の困難と打戰つて堂々昔日の人氣を席捲したこの劇團た、勿論彼等が練りに練つた新國劇としてのユニークな劇風の存在はあくまで强調さるべきで徒らに新味にばかり追て貫ひたくはないが、最近の新國劇から受ける印象はなんとなく一進一退、頗る稀薄になり勝ちである氣持をどうしようもない自分だ。が久松女史初め、幹部諸氏の今後尙統制よろしきを得ばこれも單なる老婆心として解消してしまふかもしれない、そうありたいものである。且つ、前進座が關西における新國劇の領域に逐日迫りつゝある丈に、尙更泰然自若たる新國劇の眞生面に接したい。

◇

辰巳島田兩優の心血を注ぐ奮闘振は、新國劇興隆史を飾る好個のダイアログたり得べきものであるが、亦その背後における大きな力を忘れる事は出來まい。澤正亡き後孤壘を守る久松女史初め元老は云はずもがなすべての若き人々の强固なる團結の賜により一更の光ありと思はせる、それはあくまで偉大なる故澤正氏の不滅の藝術精神である。彼の魂は今でも生きてゐる、そして見へざる一大潛在力となつて絶えず新國劇を守り、舞台の上に働きかけてゐる。新國劇は實に澤田氏の偉大なる藝術精神に生き、且生かす事によつてのみ更に光り輝かねばならない。この大先輩の遺鉢を

繼ぐ、現在の新國劇は誠に多幸なるべきであると共に、幾多の遺されたる逸才を擁して愈々洋々たるものがあるのだが……。

◇

辰巳島田兩氏は既に現在に於ては夫々確固たる藝風を示してゆるがない。一は剛快、一は纖細、しかも兩者常に探究を忘れず、共によく獨自のパースナリテイを生かして餘さぬところを認める。しかし共に萬能役者たる事は喜ばぬところだ。自ら氏等の進まるべき道は既にその胸奥に期して明白なる事と思ふ。新生面の打開も結構だが、餘りに瓢逸に過ぎる事は慎んで欲しい。自己にのみ許されたる道に向つてあくまで精進されん事を切望して止まない。辰巳氏の荒削な藝風に最近とみに深みが加はつて來た事は喜ぶべき傾向だし、島田氏のあの巧緻な裡に諷刺味を多分にきかせて尙且グッと引締めてゆくあの底力のある藝風も益々圓熟して來た樣だ、今にして過渡期を云々されるは氏等にとつても遺憾に堪へぬところと重ねて自重研鑽を祈る次第である。

◇

相當重要視されてゐながら從來比較的目立たぬのは高木氏だ。パイプレーヤーとしての氏の功績は過去に於てすでに小川氏と共に充分認められてゐる處だが、未だにどうも舊套を脱し得ぬ樣な惱みを感得する。舊昨には屬するがかの『夜の帝王カボネ』に於ては、近き將來において斷然辰巳島田兩氏と共に大いに立役に活躍し得べき人として、果然その片鱗を發見した自分は心秘かに快哉を叫んだものだつた。辰巳島田兩氏に伍してむしろ堂々喰入つてゐた當時の氏の舞台姿が未だに強く眼底に殘つてゐる。見せ場の少い難役だつたが實に見るものをして、一種の賴もしさを覺えしめた適役であつた事は氏の實力を十分に立證してゐる。高木氏の現況や如何に。

高木氏を以て第二の中井たらしめる事は無暴であらうか。勿論それは高木氏にとつて大なる魅力であり且又より大なる修練を要する大業でもあらう。しかし氏はそれを成遂げる丈の熱と力を十分に持つてゐる筈だ良き後繼者としても。だが氏の藝風ほど廣範圍に亘り得るものは一寸他には見られない。それ丈に又多くの危險を感じるのだが氏の今後こそ最も期待し得るもの

と信じてゐる。

◇

高木氏と共に閑却してはならない小川氏がある。この人の持味は云ふ迄もなく三枚目的洒脫味を多分に含んだ役柄に於て斷然異彩を放つてゐる。外見から受ける感じ丈でなく、自然に口をついで出るこの人のセリフには、中々に盡きぬ輕妙さや氣安さと共に一寸乙なシャレを聞いてゐる樣な味はひがある。以前はセリフや態度に何となくギゴチなさや不自然味が感じられてどうにも我慢が出來なかつた。又どつしりした重苦しい役處がこの人には全然不向であるにも不拘、配役の都合からか、從來しば〳〵氏は配役の上でも損をしてゐた樣だ。これは誰しも一應は通らねばならぬ過程だつたかもしれないが小川々々の掛聲の割合に慘めな映へぬ姿を自分はよく見受けたものだつた。近頃はすつかり圓轉洒脫味をその役處と共に自己藥籠のものたらしめてしまつた。小川氏の進境は高木氏の存在と共に愈々新國劇に缺けぬ一方の旗頭として推すべきであらう。

◇

こゝに又特異の藝術家、新國劇で唯一人とも云ふべき性格俳優に雄島氏が嚴として存在してゐる事を新國劇の爲に喜びたい。

どうしたわけか之迄よく顏を眞白く塗つてゐるのでなんだか奇異に感じさせられむしろ不愉快に思つた事が屢々あつたがそれも昨今は、變化に富む扮裝の巧みさ、板について來たあの一種獨特のセリフと共に氏の性格俳優としての境地が、漸やくその臭味から脫して本格的になつて來たのが見受られる。雄島氏を主役とした秀れた脚本の出ないのも遺憾だが、新國劇としても、雄島氏をもつと思切つて表面に押出して欲しいものである。氏を中心として、神秘、怪奇味を含んだ舞台劇への進出も新國劇の今後採るべきものゝ一つであるまいか。自分の自由な空想が若し許されるなら、例へばかの「丹下左膳」における一種怪異の性格を持つ人物の如き實際は雄島氏のものとして、より生かされたものではないだらうか。一人よがりのかつてな空想と一笑にふされても仕方がないが、又事實辰巳氏の得意物として當時の素晴しい好評でも辰巳氏の巧みな演技は認められる。と同時に若し雄島氏にこれを演し

て見たら……とそんな氣持が不思議な位に強く興つてくるのだつた。それは冒險でもあり結局世に迎へられぬ事になつたかも知れないが、或ひはもつと、迫眞性に富んだ丹下左膳が描かれてゐたかもしれない。

◇

その昔、と云つてもそう遠い話ではない。かのスポーツ物の興隆時代、『マダムKO』『富永遊擊手』等で未來ある人として自分の印象に殘つた人々に其頃の新人伊藤氏があつた。外見から受ける感じそのまゝに持味を生かしてこの種のものでは優に島田辰巳兩氏に迫るものがあつた。特に『富永遊擊手』ではしみ〴〵學生らしい純情さを味はされた丈に蓋し好評だつたのは當然であつたらう。第二の島田氏たり得る十分の素質を具備した人としてこの人の近業に大きな期待をかけてゐるが、一時はどの配役中にも見出せぬ事がよくあつた。

或時は病氣靜養の爲とか聞いた事もあつたが、最近惠まれぬ氏の大いに健闘を祈りて止まない。

丸茂氏の名を聞く事も古く、もうかなりの堅實味が加つていゝ筈だが、この人も又配役に惠まれぬ不運な人だ。辰巳島田氏等に伍して新國劇の爲に涙ぐましい

PEACE SYRUP

34年 サンマースター

シロップ界の權威

ピースコーヒシロップ

ピースフルーツシロップ

Kyoto Maru Co

程の奮闘振は察しられるが、氏の現在は矢張り一年前の氏である。一作毎に期待を新にして見るのだが淋しさが残るばかしなのはなんとしても、心のこりな事だこの人に判然とした個性味の見出し得ないのも原因の一だと思ふ。前途は長い、やがては氏にも獨自の境地が開拓される事だらう。その時こそ氏の爲に聲をより大にして喝采を叫ぼう。この意味に於て氏も將來新國劇を擔つて立つべき未來ある新人として捨てゝはならない人である。孜々として倦まぬ新人のある事は多子僻々たる新國劇の力強い未來を思はせて、頼もしい限りでありまこと堅忍不拔の團結と共に些細な端役に至るまですべての人々が、各自の與へられたる役に生きる事に滿足を以て將來の爲に刻苦精勵してゐる事は新國劇美談として衆知のところ、語るべき人は多い。その堅き女優陣と共に、夫々その期待するところを摘記して見たいが餘白の自由を許されないから、別日の機會にゆづる事にする。

久松畑中金井野村氏等については今更贅言を要すまい唯々此等若き精兵の常に良き先導者として、一層その豊富なる技能の涵養に不斷の鞭撻を御希ひしたい。

（九、九、一五）

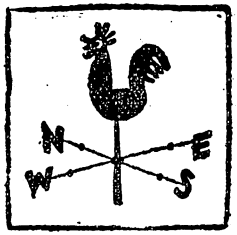
花柳病科

性病科
皮膚科

電話戎二六三六番

藤原醫院

南區難波新地五番町
戎橋電停二ツ南辻西入
歌舞伎座南側戎橋筋西入



賢外集

（現代語版）（中）

大橋孝一郎譯述

承前

○

藤十郎申しまするに、「歌舞伎役者は何役を勤める時にも、正眞をうつす心がけを忘れてはいけない」と申しますこれは彼の所謂寫實主義を尊重したことを物語つてゐる言葉です。しかし、續けて云つた言葉が面白いです。「だが乞食の扮裝だけは或る程度で止めて貰ひたいものだ。何故と云ふに、御見物衆はお娯みにいらつしやるのに、餘り穢いもの見せられては第一感じが悪いですからねエ」

○

坂田藤十郎が金子吉左衛門と連立つて芝居から歸へる途中、フト高瀨川の橋上に立止つて、水の流れる樣をつくづくと詠めて歩まうともしません。吉左衛門は不思議に思つて

「何か川へ落されたのですか」

と問ひますに答がありません。ヤヽ暫らくの後、

「ア――ア、淸々した」。

と如何にも氣持よげに嘯いて其の頃の藤十郎の宿だつた河原町四條上ル宅へ立歸へられたと云ふことです。

これは、昔から加茂川の水と賽の目とは自分の思ふ儘には行かぬと云ふ諺を思ひ浮べ、ものゝ眞理を究め、大いに大乘的な氣持を修養された一例と見ることが出來るのであります。

○

坂田藤十郎が祇園町のとある茶屋の女房に戀を仕懸け、やがて、扨――と云ふ場合になつて、女が奥の小座敷へ伴ひ、入口の灯を吹き消しました……不思議なことには、そのトタンに藤十郎は逃れる樣にしてにげ歸つて終つたのであります。

その翌朝のこと右の茶屋を訪れた藤十郎は女房に向ひ申しまするに、

「此度の狂言に私はどうしても密夫の役を勤めねばなりませんが、私は今迄にそんな不義を犯したことがなく、男相手の稽古ではどうも情がうつらないので弱り果てた結果思ひ付いたのが昨夜の一芝居でした。貴女には眞に濟まないことだと思つて居りますが私には非常によい稽古になりました」

と丁重に挨拶されたのです。これを聞いた一座の人々は、

「名人と呼ばれる人の心懸けは、我々凡人には迚も及びも付かないものだ」

と感じ入つたと云ふことです。

「附記――菊池寛の名作鴈治郎の當り役「藤十郎の戀」は此の項から題材を採つて戯曲化されたものであることを附記して置きませう。

○

藤十郎が二三人の女形等と一緒に、石山へ遊びに參りました際、偶々御酒宴を張つておいでになりましたさる殿樣の御目に止まり、

「直ぐ伺候する樣に……」

との仰せに、

「有難き仕合せ」

と速に御幕の内に伺候して、お盃を頂戴し、また樣々のお話など申上げましたので殿の御氣嫌は一方ならず、歸るさになつて

「何なりとも所望するものあらば申せ」

との御言葉に、ためらつて居りまするとと、近從の一人が、それでは返つて殿の御氣嫌を傷ふものと言葉を添へましたので、咄嗟の場合として、フト目に止りました松を見て、

「ではお言葉に甘え、その御幕の邊りにある松の樹を拜

領仕し度く存じます」

とお約束して、藤十郎は歸宅したのであります。

斯くして數日後のことで御座ゐました。藤十郎の家の表に當つて大勢の人聲が喧ましく致しますので、立出て見まするに、いつぞや石山で殿樣と御約束致しました松の樹が丁度到來したところなのです。

「私が所望した松の樹であればこそ、かうして約束を違へず送り屆けて下されたのだ。而も小さな樹なれば兎も角、かほどの大木なれば容易く掘ることも六ツかしい上に色々と面倒な手續きもされた事であらう。何と云ふ有難いことでせう。早速庭へ植へて下い」

と申しまするに、松の樹が餘りに大きいので入口につかへて入りません。その爲に男衆がワイワイと騷いで居りますのを藤十郎は叱り付けて、

「つかへて入らぬものなれば、塀を壞して入るればよいではないか。後から修繕すれば濟むことだ」

と申されました。居合せた金子吉左衛門は、名人の心は別なものだと感じ入り、此の事を人々に話されたと云ふことです。

○

藤十郎申しまするに、舞臺の上で傾城買の狂言を勤めるのさへ隨分、風紀上面白くないと思つて居りますが、どうも仕方がありません。然るに近頃では、甚だしきは舞臺で床を敷く狂言まで出來て來ましたが、實に言語同斷の極みです。と……

これは勿論古人の教を知らない作者の罪ですが、また勤むる役者も同罪だと云つて良いと思ひます。かねがね申して居ります藤十郎の言葉に、「二十から三十となると役者の行儀が亂れるものだ」と申して居られましたが、成る程と思ひ當ります。殊に近頃の御見物衆は御家族連れの方々が多いのですから、餘計にかう云つた舞臺には氣を付けねばならないと思ひます。扨々にがにがしいことです。

――（未完）――

劇評・九月の中座

西尾福三郎

畫間若手奬勵劇。若者は若者同志、筆者も若藏の一人として諸君の仲間並に忌憚なく批評させて貰はう。

姫競双葉繪草紙。

小栗判官の芝居から横山館と浪七住居を除いたら何が殘る――と開き直る迄もなく、かう云ふ狂言の扱ひ方は何とか考へ直してほしい。これは會社側への注文としておいて。とは云へ當時父殺しを題目にした横山館が公然演れる譯はなく、横山館が出なければ自然浪七住居は演れないし、となつてくると、やつぱりこれだけで我慢しなければならない譯か。賓光院の見染めも花見の場が紅葉になつてゐたがこれでは見染めと云つたやうなボーッとした夢幻的な氣分は出ない。この場の成太郎は氣を入れてやつてゐたが、以下の場は車輪にやればやる程現代娘のヒステリーめく。もつと間をもたせて潤ほひを出してほしい。この人の聲がキイつくのも時によく、又時に悪い。それに引かへ延太郎の小萩は成太郎程の努力をせずしていつもの調子で樂々と柄に適つた役所で無難に納つてゐた。吉三郎の小栗もこれと云ふ演所のない場面乍ら相當の出來で、その他の諸役も前にかいた理由で、狂言の不適さの割にはよくやつてゐた。

敷革の會我

小河内家二人の行儀のよい舞臺振りを見せるだけで、初舞臺の時の生立會我程演所がないのは御曹子物足らなさう。政治郎の梶原も行儀がよい。

曇ぬり

間狂言物としてもつとのんびりと演じてほしかつたが、若い人にそれを望むのは無理か。政治郎の太郎冠若が今一息車輪だつたら成太郎は食はれてゐたかも知れない。茲でも成太郎は損な努力をしてゐた。

白石噺

スル〳〵と障子が取除かれた瞬間宮城野が馬鹿に大きく見へた。今度のゲームは錦吾のものだとその時思つてしまつた。この場の宮城野は大きく見へる役そして大きく見せるしかけであるが、それを承知の上で大きいぞと感じさせた所を買ひたい。夕霧でもなく吉野でもなく、又遠に錦吾の當り役だつた。延太郎のおのぶも演る所を充分辨へたよいおのぶであつたが少し綺麗すぎた。豪華な姉に對する鄙びた妹の對照を忘れてゐる。例のある型だからと云つてそのまゝやらずに、一つ人形の型に立歸つて朋黄石持々に手甲脚絆、巡禮衣裝と云つた所が見たかつた、それが勉強芝居と云ふものである。吉三郎の惣六も江戸育ちの水が物を云つてこの一篇畫間第一の出來である。

今回の奬勵劇がもし前回以下の成績だとしたら、それは俳優よりもむしろ狂言の責任だと思ふ。そして今後斯樣な機會があれば新作物の一つ位は是非共加へる必要のある事を力説しておきたい。新しい物をやれば危氣のない人々が無殘やな古い物と取組んで討死してゐる。かう云ふ時には毎日替りと云ふ事にしてこそ奬勵劇の使命が發揮されるのだ。

通覽して諸君の熱心は充分認めるが、今一息色氣に乏しく、潤ひのないカサ〳〵した感じも否み得ない事を附加へさして貰ひたい。

夜間本興行。頭に出雲の處女作そして大切に同じ作者の代表的名篇を据へた所記念興行として近來快適の布陣振りと褒めたい。

身代り音頭は次のかされを割愛してゞも頼員館の場を出してほしかつた。あのまゝでは力若の幽靈が化けて出るかも知れない。自然延若の太郎左が泣き過ぎて孫の身境迄餘分に説明なければならなくなつてくる。それと踊りの舞臺がやゝ明る過ぎた事、太郎左の眼鏡を黑縁にしたら等々、色々注文はあるが、要するに太郎左衛門以外は皆平凡だつた。

かされは近年東西でよく出る全くかされ〳〵であるが、問題は魁車のかされで、衣裳の好み、跛足の引き具合など研究の餘地が殘つてゐるやうだが、餘り書きすぎて化けて出られると怖いからこれ位にしておく。

つま八は京都所演の際は一幕

につまり過ぎて少し窮屈だつたが、今度は前後に伸びてゐる。前の場はとにかくとして、彌兵衛とおつまの殺しを二場に使ふより、あの効果的な果て太鼓の餘音の殘る舞臺で萬事けりをつけた方がよくはなかつたらうかともあれ延若の八郎兵衛、魁車のおつまでコツテリとしたお手前を見せて貰つた。かされの衣裳はとにかくとして、おつまの衣裳、殊に黑地に月と秋草をあしらつた好みなど新駒屋大凝りであつた。

葛の葉は當興行隨一の重鎭として名作者出雲顯揚の意義は十二分に達せられた。殊に子別れからさし駕籠へ飛ばさずに蕭條とした葛の葉道行きの一場を差し加へた事は當然とは申せ効果百パーセントだ。

福助のさびた味が葛の葉の幻想に一層の神秘を加味し、延若の保名があの肥滿性を巧みにかくして柔かな和事の妙を見せてゐた。欲には惡右衛門を魁車に演つて貰ひたかつた。

今度で目についた事は延若が全能的に働いてゐるに反し、壽美藏が與右衛門と云ふ損な一と役の外、氣の毒な役許り演つてゐる事だつた。

明治四十年十月 道頓堀各座案内

◉中村梅玉と福助の改名　角座十月興行に於て福助改め二代目中村梅玉となり息政次郎四代目福助となる右團治の口上あり其披露として各品負先へ配りたる擂物の句に

身にあまる蕉を受けて梅の本　福助改　梅玉

重荷負ふひたえに汗す小春哉　政次郎改　福助

また此所に再び匂ふ梅の花　芝翫

皆おなじ園の種なり梅の花　鴈治郎

預りし園の古梅植かへて　仁左衛門

◉中　座　一日開場狂言は前「源平布引瀧」中「俊寛」次「合邦」切「播州皿屋敷」にて役割左の如し

瀨尾十郎兼光・俊寛僧都・青山鐵之亟・三上胴六（團藏）木曾前生義賢・修行者合邦（橘三郎）齋藤實盛・丹左衛門基康・娘お菊・早川主水（巖笑）奴折平・蜚千鳥・玉手御前・船瀨三平（德三郎）漁師九郎助・瀨尾太郎・馬士多九郎（荒五郎）息女待宵姫・丹波少將盛經・高安俊德丸・妹お峯（茂々太郎）平宗盛・息女淺香姫・細川巴之助（荒太郎）難波六郎・飛脚左衛門・平判官康親・岩淵忠太（瀧十郎）娘小萬・合邦女房お德・息女園姫（若橘）平重盛・御臺葵御前・奴入平・後室松月尼（菊次郎）伴太郎吉（巖右衛門）

◉角　座　十日開場狂言は前「だんまり」「菅原」「道明寺」「車引」「寺小屋」中「土屋主税」次「矢口渡」切「道明寺」にて役割は左の如し

伊豫操純正・舍人櫻丸・土屋主税・下男六藏・武部源藏（鴈治郎）田舍娘おたき・伯母覺壽・娘戸浪・新田義峯・所作彌念（玉七）判官代輝國・涎くり太郎・待女おその・娘お船・所作清水（政次郎改福助）宿稱太郎・大竹五郎・所作竹の坊（右之助）所作村念（長三郎）妻龍田・御生錦の前・所作道心・川瀨六彌（米十郎）百姓太郎兵衛・西川賴母・所作頓念（林若）茄屋形・所作才念（福之助）舍人梅王丸・女房千代・晉其角・渡し守頓兵衛（福助改め梅玉）一子小太郎（好雄）奴可內・百姓權六（傳藏）阪本其雲・三崎十作（卯十郎）軍太・百姓太郎兵衛・落合其月・しつくり作兵衛（箱登羅）土師兵衛・所作齋坊（我藏）奴宅內・杉王丸・下男三助・大高源吾（延三郎）津多野左衛門・百姓與兵衛・藤原時平公（傳五郎）大監物清基・菅相丞・春藤玄蕃（多見之助）金比羅新成孝・舍人松王丸・白拍子小櫻（右團次）

◉朝　日　座　一日開場狂言は前「觀音岩」切「天の網島」にて役割は左の如し

石卷林藏・紙屋治兵衛（延二郎）村井千枝子（山田）娘お豊（英）紙家の平助（秋山）石卷庄右衛門・丁稚三五郎（福井）石卷令孃お幸・紀の國や小春（廣三郎）母およし（松山）下男蝮の權太・五貫や善六（小織）萩原令孃糸子・粉屋右衛門（成太郎）倉本直

子・河庄内お正（長二郎）文學士伊丹欣三（堀）百姓五作（矢野）富士の太七（松平）藤原彌十郎（市藏）文學士大河内一（野垣）醫學士頓宮修三郎（篠塚）文士奥隅正也（秋月）

〔註〕

橘三郎（先代）茂々太郎（九藏）好雄（扇雀）延二郎（延若）成太郎（魁車）長二郎（壽三郎）

（明治四十年十月）

芝屋道樂より

執筆者噂聞書（ふでとるもの、うわさきゝがき）

珍阿彌

×

本誌の高谷伸氏、去る颱風の當日、大事な大事なお子さんが登校中のことと氣が氣でならず、終に制し得ぬ親心は、あの吹きすさむ暴風中に、氏を學校まで走らしめた。が、その時の氏のいでたちを見てあれば、尻ばし折つた其の上に、頭から馬尻をかむつたと云ふ珍姿。

あとでお見舞に上ると、

「飛んだ寺小屋の一幕で、チョマよ、チョマよと迎ひに行きました。」

と、芝居に例へて話されたのは失張りその道の方だけはある。

×

辻田公紀氏は京都日日新聞の演藝部を擔當される芝居通で有名な方だが、それだけに御年配の方も、若手の多い記者連や宣傳部連とは、隨分かけへだたつてゐる爲か、氏に『老』と云ふ尊稱を奉つて、「辻田老」と申上げてゐる。然し當の辻田老、果して老なるや否や。それは小生の、ローにも判らないことではあるが、ローもそうではないらしいとは、伊賀越ではないが

「人の噂、人のウワーサー……」

×

京都の大橋孝一郎氏、たまたま大阪へ登場すると見ると、實に東奔西走の藝當を演じるが、先月も、一時京都發、二時半千日前着大阪劇場でダンテの魔術團見物、三時半より中座で「白石噺」「太平記」「累」まで觀劇（此の間に夕食）七時より歌舞伎座で「マーカス・ショウ」觀賞九時廿分バレ、九時四十五分新京阪急行乘車、十時半、既に寢に付いて居りましたとき。アーア、シンド。

×

森ほのほ氏が妙なものに後援し出したと云ふので探ってみると、朝鮮舞踊のハイ龜子一座と云ふ變つた連中。處が森氏にハイ龜子を後援せしむるに至つた人が誰あらう、市川猿之助だと云つたら諸君よ、一寸驚くだらうが本當の話だから仕方がない五月に京都南座へ猿之助が乘込んだ時、旅のツレヅレから見に出かけた萬歳小屋で、計らずも見たハイ龜子に猿之助、スッカリ感心して、樂屋で喋り嘯したからたまらない。澤瀉屋一黨次から次へと見物に出懸けたものである。兼ねての友達であつた森ほのほ氏も、此の時の猿之助の宣傳に乘せられて出懸けたのが、そもそもの事の起りだと云ふ。それにしても、森氏も中々嬉しいところがあるなあ、なぞウカウカ云はうものなら、

「いけれェんですかい。」

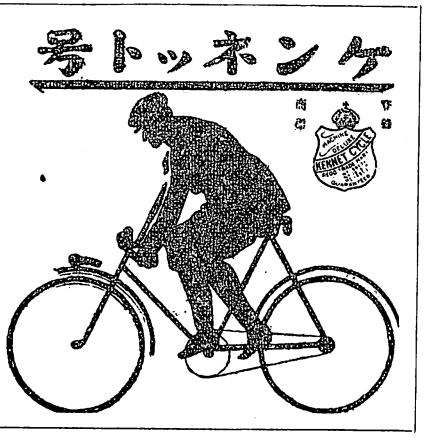
と、あの齒切れのいゝ江戸ッ兒辨で、一發やられますゾッと、これは御注意。

本誌の年極御講讀を

すゝめ致しますお

堀頓道

唯一の演劇雜誌　¥ 3.30



泡を食つた。胃下垂擴張である僕がたまに泡を食ふのも、よかろう——と宣傳部の惡童ども、囃し立てるであらうが、同じ食ふたら、やはり、スエヒロのテキの方がいゝと思ふ。而かもそれがいたゞきながら尙結構である。

▣この編輯後記も毎月同じやうなことを繰り返してちや面目ないから、僕が、熱をあげたり下げたり、することにした。

▣宣傳部御一同の新版ニックネームを素つ破ぬく。田中慶助さん、河内の百姓、名付親不知、僕の隣りにおはす、三郎高田氏、長太郎はん。事の詳細は日を改めて僕が說明する。冬一佳田氏は水漬りのバ、サン——その結果、住みなれし、築港から、轉宅しちまつた。どんじりに僕のを申上げるが、立勝助この解說は次號で鳥江部長がされると思ふ。

▣鳥江部長と云へば、今月は、大劇の「青春の花束」角座の「吉岡先生」歌舞伎座の「春秋平家物語」など、相當以上相當なものである。

◈僕の頁

村上 勝

▣二十一日の風水害、その後に來たものは、吉右衛門來阪中止で、今月の僕は文字通り

昭和九年十月一日發行
月刊雜誌『道頓堀』第九年第九十七號

◇誌代は前金で拂ひを願ひます。
◇郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所
大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部 金參拾錢（郵稅壹錢五厘）

昭和九年九月廿八日 印刷
昭和九年十月一日 發行

大阪市南區難波新地三番町
（大阪歌舞伎座內）
發行者 松竹興業株式會社大阪支店 鳥江鐵也
共同編輯 山上貞 松本泰 一三
印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區難波新地三番町
（大阪歌舞伎座內）
發行所 松竹興行株式會社大阪支店 道頓堀編輯部

紙巻煙草

スキナ石鹸

スキナあぶら取紙

発売元

関西電燈株式會社

大阪

支店

中田スキナ屋

大阪

昭和二年十月廿五日　第三種郵便物認可
昭和九年九月廿日印刷
昭和九年拾月一日發行（毎月一回）
「道頓堀」第九十七輯　第九年拾月號

「道頓堀」第九十七輯　第九年拾月號

一部　金參拾錢

淺田飴（あさだあめ）

固形淺田飴は旅行、遠足
觀劇、講演會など人混中
に用ひて咽喉を保護し、
呼吸器病を豫防す。

たんせき一切、感冒
百日咳、喘息
虚弱症、病中病後
老人小兒の補血劑

本東京
舗堀内伊太郎